

令和 6 年度

野洲市埋蔵文化財調査概要報告書

2025 年 3 月

滋賀県野洲市教育委員会

序 文

野洲市は、琵琶湖の東南部に位置し、野洲川と近江富士の三上山に代表される自然豊かなまちです。埋蔵文化財では、大岩山出土の銅鐸 24 個をはじめ、国史跡大岩山古墳群や重要文化財西河原遺跡群出土木簡などが広く知られ、これらを支えた人々の営みが市内各地の遺跡として周知されているところです。

本報告書に収容する主な調査として小篠原遺跡・西河原遺跡があげられます。西河原遺跡は野洲市を代表する奈良時代から江戸時代にかけての集落遺跡として知られ、最近の宅地開発に伴う発掘調査によって、かつての集落の広がりが明らかになってきています。

本書が郷土の歴史、文化財への理解と保護に寄与するとともに、野洲市の魅力の再発見につながるきっかけとなることができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和 7 年（2025）3 月

野洲市教育委員会

教育長 北 脇 泰 久

例 言

- 1 本書は、主に令和5年度から令和6年度に実施した、野洲市内の埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査は野洲市教育委員会文化財保護課が実施した。調査体制は以下のとおりである。
令和5年度 教育長 西村 健 教育部長 馬野 明 教育部次長 北脇康久
教育部次長兼文化財保護課長兼歴史民俗博物館館長 行俊 勉
課長補佐 河合順之 課長補佐 福永清治 専門員 進藤 武
主任 鈴木 茂 技師 渡邊貴洋
令和6年度 教育長 北脇泰久 教育部長 田中明美 教育部次長 行俊 勉
文化財保護課長兼歴史民俗博物館館長 福永清治
課長補佐 河合順之 主任 鈴木 茂
主任 岡山仁美 技師 渡邊貴洋
- 3 本書の執筆は調査補助員の協力を得て、各調査担当者が行い、各文末に明記した。
編集は課員の協力のもと岡山が行った。
- 4 現地調査における基準方位は、特に設定しない限り真北を示す。磁北や座標北を用いる場合はその旨を図中に表記する。
- 5 標高は、野洲市公共下水道台帳図の水準を基準としている。
- 6 遺構の表示記号は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の略号を準用した。
- 7 遺跡名や遺跡範囲については、『野洲市遺跡地図』（野洲市教育委員会 令和2年8月5日改訂）による。
- 8 土色は、「新版標準土色帖」（1993年版）などを参考にした。
- 9 出土した遺物および記録などは、野洲市教育委員会で保管している。
- 10 現地発掘調査および整理作業は、下記の方々に参加・協力を得た。（敬称略）
山崎 馨 大黒康弘 松下嘉暢 中川九英
公益社団法人野洲市シルバー人材センター

目 次

序 文

例 言

目 次

第1章 十八田遺跡	野洲字浅田 1687 番地 4 ほか 17 筆 ……………	1
第2章 西河原遺跡	西河原字天皇前 2026 番、2027 番、2028 番、 2029 番、2030 番、2031 番 ……………	15
第3章 小篠原遺跡	小篠原字堂ノ後 1977 番 4、1977 番 5、1978 番 5、1978 番 6、 1978 番 7、1981 番 4、1981 番 5 ……………	38
第4章 中畑・古里遺跡	行畑字村ノ内 891 番、892 番、893 番 ……………	44
第5章 小篠原遺跡	小篠原字和田後 1922 番 4 の一部、1922 番の一部 ……………	48
第6章 小篠原遺跡	小篠原字和田後 1922 番 3、1922 番 13 ……………	54
第7章 野々宮遺跡	富波字山口甲 523 番 1、524 番 1、525 番 1、 526 番 1 ……………	67

報告書抄録

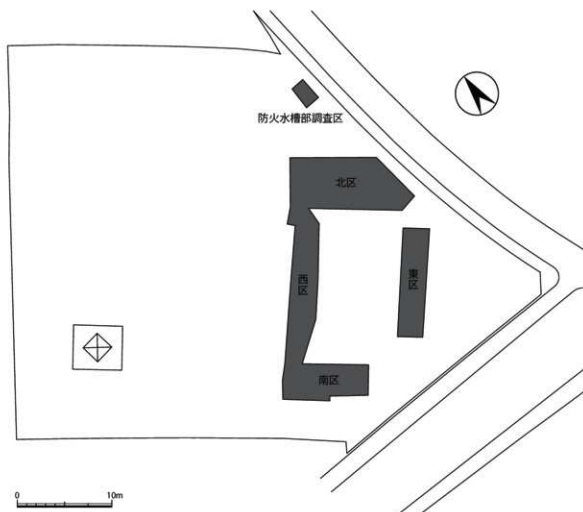


図2 調査区配置図

削時の排土を仮置きする空間を設けていたため、この部分の調査を後回しとしたことから、便宜上、独立した調査区として扱い、西区・南区接続部と呼称する。

北区は体育館基礎の北東側にあたり、設計上、平面形は台形状である。この部分の面積は約 272.64㎡である。調査区の北西側は遺構面に達する大規模な攪乱がある。東区は体育館基礎の南東側で、面積は約 127.68㎡である。東区と南区の間は通路として利用していたため、未掘削の部分が存在する。南区は体育館基礎の南西側で、面積は約 124㎡である。西区は体育館基礎の北西側で、面積は西区・南区接続部を合わせて約 180.96㎡である。

防火水槽設置箇所には約 15㎡の小規模な調査区を設定したが、調査区いっばいに溝状の攪乱があり、遺構、遺物は検出できなかった。

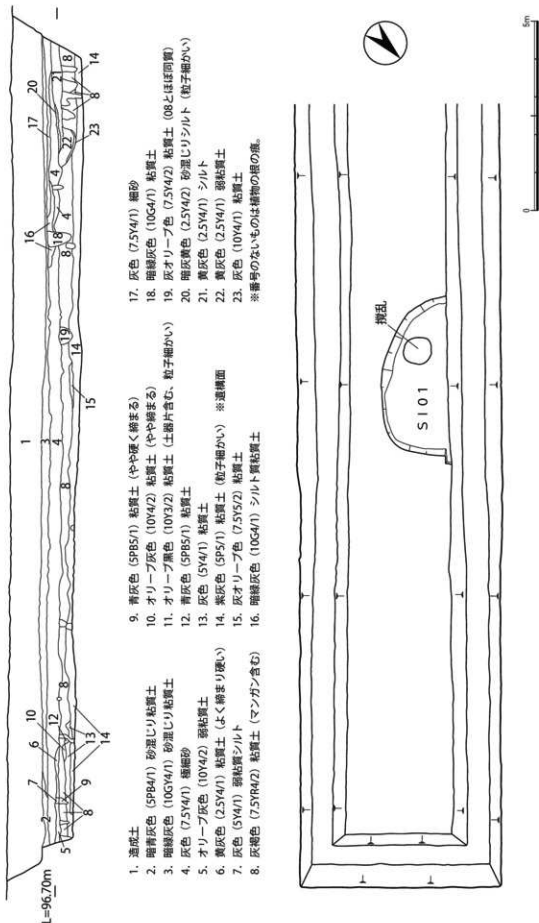
基本層序

各調査区とも地表面下約 0.8m 付近までは造成土で、その下に約 0.3m 程度の厚さで旧耕土の堆積がある。遺構面は地表面下約 1.4～1.6m（標高 96.2m 付近）の暗灰黄色粘質土上面である。

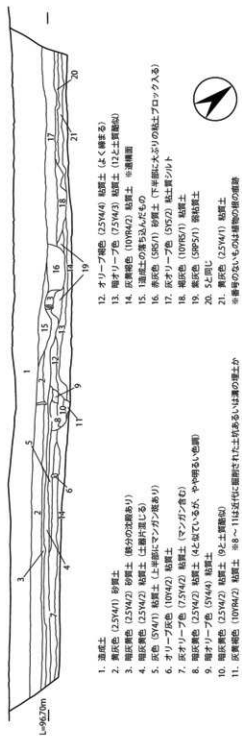
遺 構

検出した遺構は大型土坑と溝、ピットである。

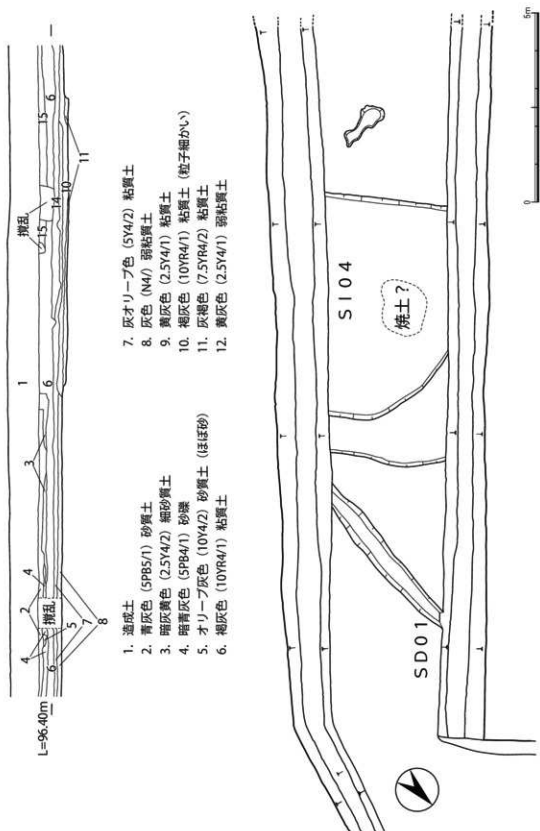
大型土坑は体育館基礎部の各調査区で検出している。部分的な検出であり、全容のわかるものは西区および西区・南区接続部にて検出した2基のみであるが、いずれも隔九



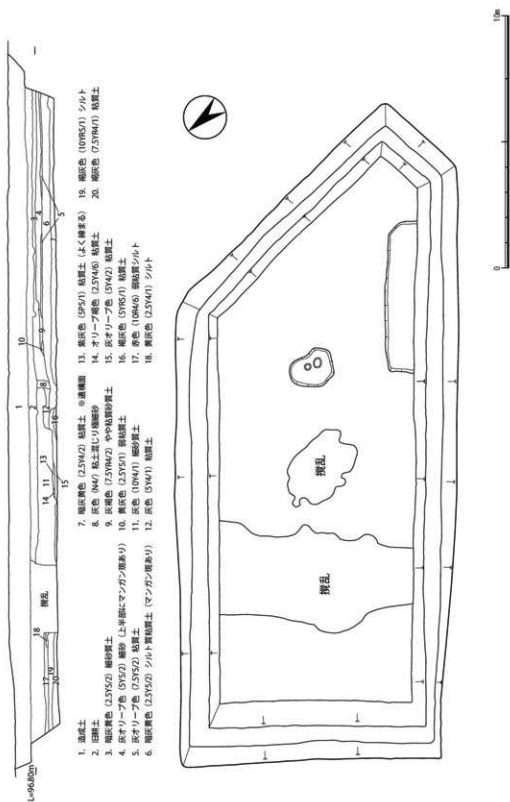
第3図 東区 平面図・東壁土層断面図

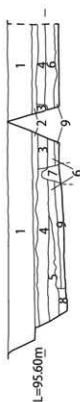


第4図 南区 平面図・南壁土層断面図

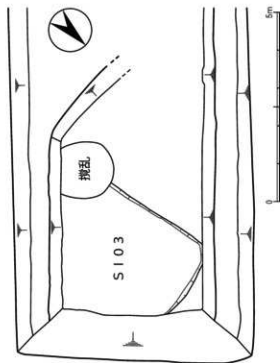


第5図 西区 平面図・東壁土層断面図





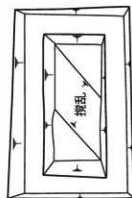
1. 造成土
2. 造成土と旧耕土の混ざったもの
3. 紫灰色 (5RP5/1) 粘土混じり砂質土
4. 緑灰色 (7.5GY6/1) 弱粘質シルト
5. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土
6. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘質土 (マンガング斑あり、特に、上半部に固まる)
7. 攪乱
8. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土
9. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 粘質土 ※遺構面



第7図 西区・南区接続部 平面図・東壁土層断面図



1. 造成土
 2. 旧耕土
 3. 黄灰色 (2.5Y4/1) やや粘質砂質土
 4. 黄灰色 (2.5Y4/1) 礫混じり細砂
 5. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 礫混じり弱粘質シルト
 6. 灰色 (5Y4/1) 砂
 7. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
 8. 黄灰色 (2.5Y4/1) 弱粘質土
 9. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 砂混じり粘質土 ※地山
- ※6～8は攪乱埋土



第8図 防火水槽部 平面図・西壁土層断面図

遺物
まとめ

方形の平面プランを持つ。周辺の調査事例から竪穴住居の可能性が高いと考えられるが、平面精査の結果、西区で検出した SI04 にて炉跡の可能性のある焼土を検出したのみで、柱穴など、竪穴住居跡を示す積極的な痕跡は検出できなかった。堆積はおおむね2～3層の水平堆積で、SI04 では上層に遺物（土器）を多く含む。

溝は西区で1条検出している。素掘り溝で、埋土の堆積は3層である。遺物は土師器の小片がわずかに出土している。調査区範囲が限られているため、性格は不明である。

ピットは主に南区で検出している。

その他の遺構として以下のものがある。まず、北区において土坑を1基検出しているが、内部にピット2基を含む。遺物は出土していない。次に、南区にて溝1条を検出しているが、埋土は褐色系の色調を呈する他の遺構埋土と異なり白色系である。周壁断面の観察結果から、同位置に近代の攪乱があり、その底部が残存したものとみられる。

遺物はコンテナ16箱分出土しているが、其中で実測できたのは36点である。

十八田遺跡のうち、旭化成株式会社用地内では過去3回の発掘調査を実施している。これらの調査はすべて駐車場用地で、本調査地の北西側に位置する。以下、本調査地の性格を検討する必要上、それらの調査成果を簡単に振り返っておく。

まず、平成8年度から9年度にかけて、本調査地の北北西にて発掘調査を実施している。この調査は駐車場造成に伴うもので、緑地帯となる中央部を除いて計10箇所の調査区を設定している。検出された遺構は掘立柱建物や竪穴住居、溝、土坑などで、調査区面積の差もあると思われるが、どちらかという敷地の北側及び東側に遺構が集中しているようである。これらの遺構は出土遺物から弥生時代後期～古墳時代前期の所産と考えられる。

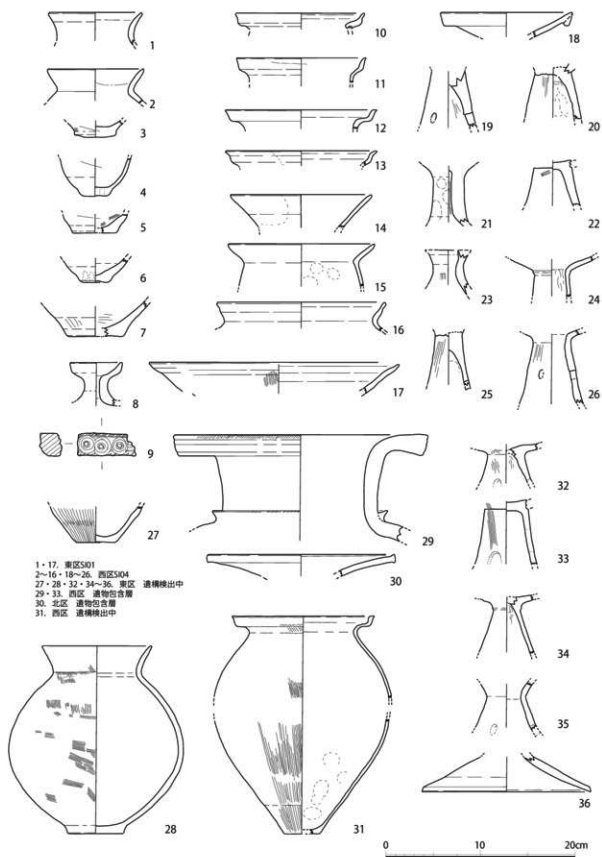
次に、平成30年度にその南西側隣接地において駐車場造成に先立つ発掘調査を実施している。この調査は擁壁部分のみを対象としたため、調査範囲が極めて狭小であったが、北東側を除く3面に配した調査区のうち、南側に遺構が集中しているのが見て取れる。主な遺構は竪穴住居と溝で、その他に住居跡の可能性のある落込みが1基検出されている。

その次に、平成30年度調査地の南西、本調査地の北西隣接地で駐車場造成に先立ち試掘調査と工事立会を実施している。試掘調査は油水分離槽設置に先立ち実施したもので、遺構は検出できなかったが、土師器片がわずかに出土している。工事立会は擁壁設置時に実施したが、掘削深度が遺構面まで達しなかったため、遺構等は未検出である。

その他、本調査地内にある鉄塔建設時に試掘調査が実施されているが、土師器片や炭化物が出土しているものの、遺構は未検出である。

十八田遺跡全体を見てみると、全体に比較的密に遺構が検出されている。その一方、細かく見ていくと、遺跡の北側に位置する本調査地とその周辺では南側に比べて遺構密度が低い印象があるが、調査区の制約によるものかもしれない、一概に「遺構密度は南に行くほど高い」とは言い切れない。大規模な発掘調査が集中している範囲とそうでない範囲が存在するため、遺構分布の全容がつかみ切れないことから、遺跡の性格について論じるのは避けるが、遺構の残存度は非常に高く、過去には約0.8mの深さが残る竪穴住居も検出されている。十八田遺跡が弥生～古墳時代の重要な集落遺跡であり、かつ遺構の保存状態が良好な、稀有な遺跡であることは間違いないところであろう。

(井上)



第9図 出土遺物実測図



西区 完掘状況（南西から）



西区 東壁土層堆積状況（北から）



西区・南区接続部 完掘状況（南西から）



西区・南区接続部 東壁土層堆積状況（西から）



東区 完掘状況（南西から）



東区 東壁土層堆積状況（西から）



南区 完掘状況（南東から）



南区 南壁土層堆積状況（北から）



北区 完掘状況（北西から）



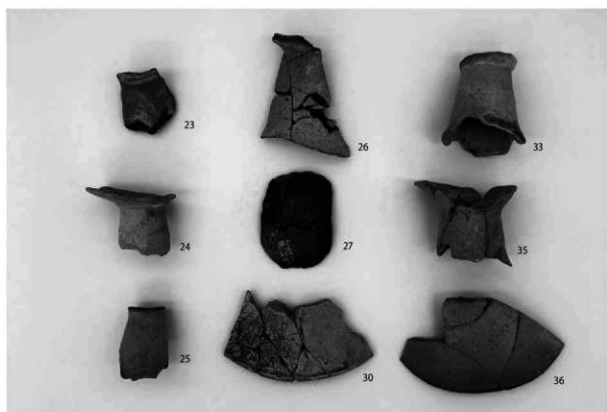
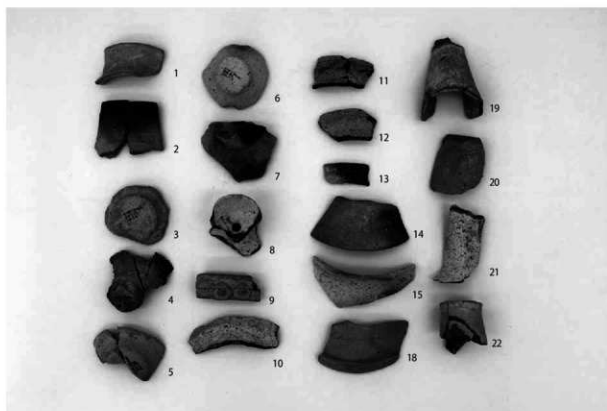
北区 北壁土層堆積状況（西から）



防火水槽部調査区 完掘状況（南から）



防火水槽部調査区 西壁土層堆積状況（南東から）





第2章 にし が わら 西河原遺跡

調査地	野洲市西河原字天皇前 2026 番、2027 番、2028 番、2029 番、2030 番、2031 番
調査原因	宅地造成
調査期間	令和4年7月28日（金）～令和4年10月28日（水）

遺跡の概要 西河原遺跡は現在の西河原集落を主要な範囲とする遺跡であり、南北約 600m、東西約 200m の古代から近世に至る複合遺跡である。西河原遺跡は現二ノ宮神社北側を中心とする地域に古代集落が存在していたと考えられ、墨書土器や和同開珎等が出土している。また西河原遺跡は湖岸に近く、野洲川の天井川化により地下水位も高いことから、木製品が良好な状態で出土する。中でも出土した木簡の内容から野洲郡家、さらにその前身である安評家の存在も指摘されており、8 世紀のコの字配置の建物が確認される小篠原遺跡との関係が注目される。なお、西河原遺跡から出土した木簡は第3期（7 世紀末～8 世紀初頭）、第8 期（9 世紀後葉）のものがあり、1 号木簡は野洲郡司が馬道里長に命令を下す郡符木簡となる。

既往の調査 本調査周辺の調査としては北東側に約 20m 地点で共同住宅建設に伴い平成 7 年（1995）に調査が行われ溝や櫓列、土坑等を確認している。遺物としては踏脚円面硯や木製品の鋸先等が出土している。鋸先は形状から土を引き寄せる「引き鋸」としての広鋸と想定され、一木簡も出土している。

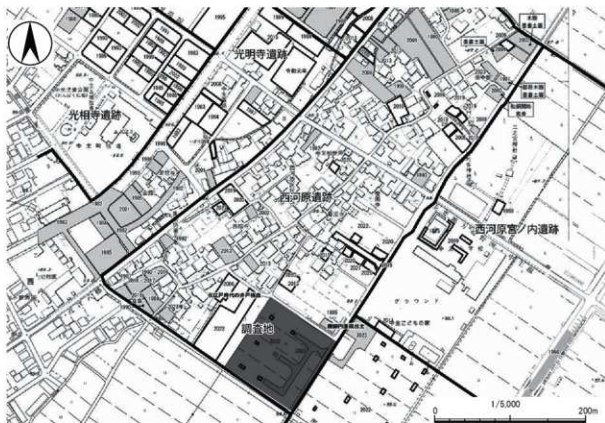


図1 調査地位置図

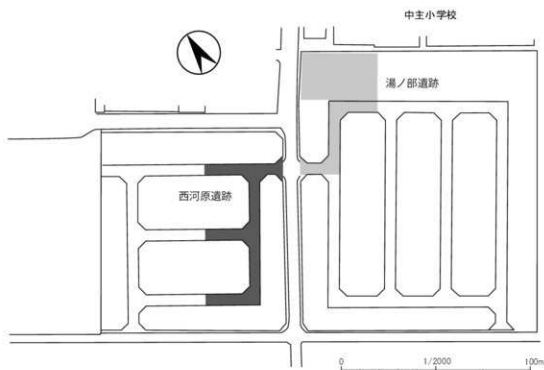


図2 調査区配置図

以上のことから、本調査地においても多数の遺構・遺物が出土することが予想された。本調査地は令和4年(2022)4月～5月に市道敷設部で試掘調査を行い、多数のピットや須恵器坏B蓋や土器器皿A等の遺物が出土したため、遺構・遺物が確認された部分について本発掘調査を行った。

調査経過

今回の調査は、市道敷設部に約826㎡の調査区を設定した。調査は重機による盛土の掘削を行った後、人力による遺構検出及び掘削を行った。造成業者との兼ね合いもあり、3つの調査区を設定した。

南側の調査区1は調査面積約514.25㎡で7月23日～9月14日、北側の調査区2は調査面積約250㎡で9月15日～10月26日、調査区1・2の間の調査区3は調査面積約62.5㎡で、10月14日～10月28日の間に行った。

基本層序

調査区1

地表面下約0.6mまで掘り下げた結果、最上層には耕作土があり、床土である明黄褐色極細砂層(2層)、褐灰色粗粒シルト層(3層)と堆積する。そして地表面下約0.6mで遺構面である明褐色粗粒シルト層を確認した。南側は攪乱されていたが遺構面は南側に向かって上がる傾向にある。

調査区2

地表面下約0.6mまで掘り下げた結果、最上層には耕作土があり、黄灰色極細砂層(5層)、褐灰色極細砂層(6層)が堆積する。そして地表面下約0.6mで明褐色粘土層(12層)を確認した。この層が第1遺構面であり、溝・ピット・掘立柱建物3棟を検出した。また第1遺構面の遺構完掘後に下層確認のため掘削を行ったところ地表面下約1.0mで灰色シルト層を確認した。この層が第2遺構面であり、流路とピットを検出した。調査区2においては中心から南側部分が高い傾向にある。

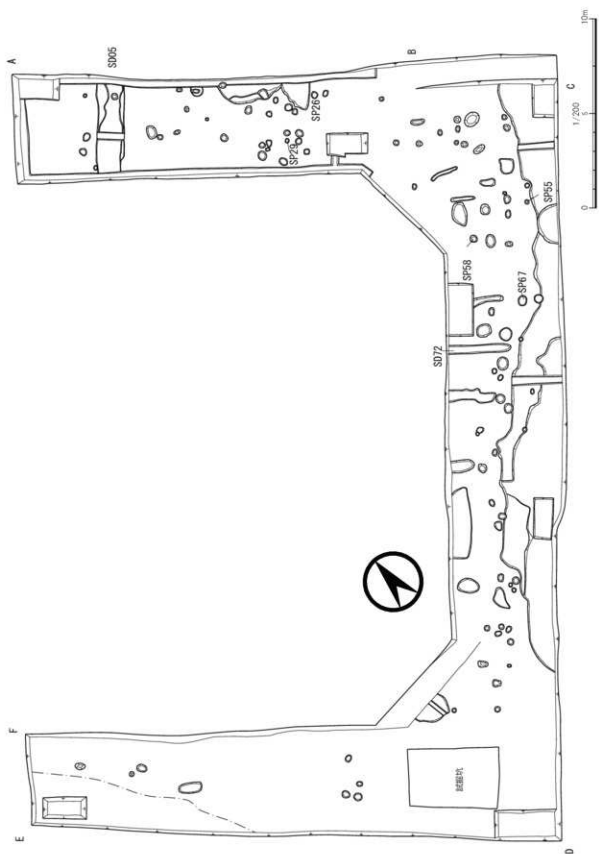
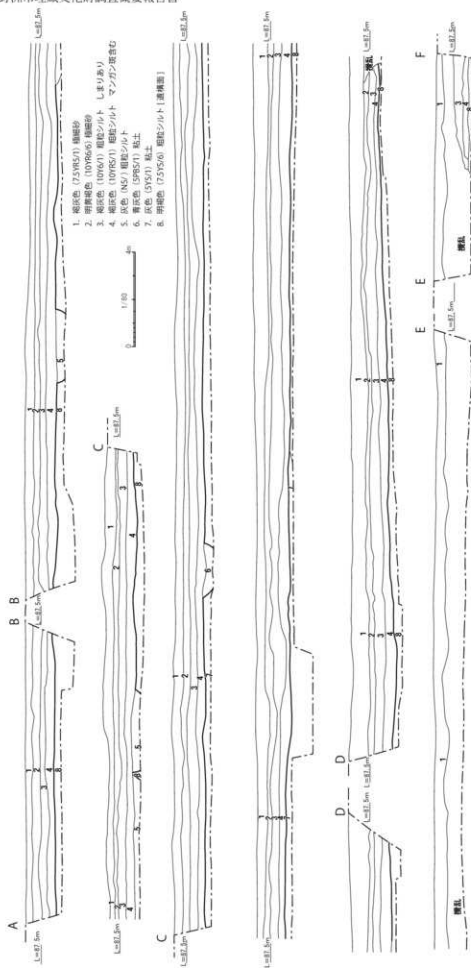
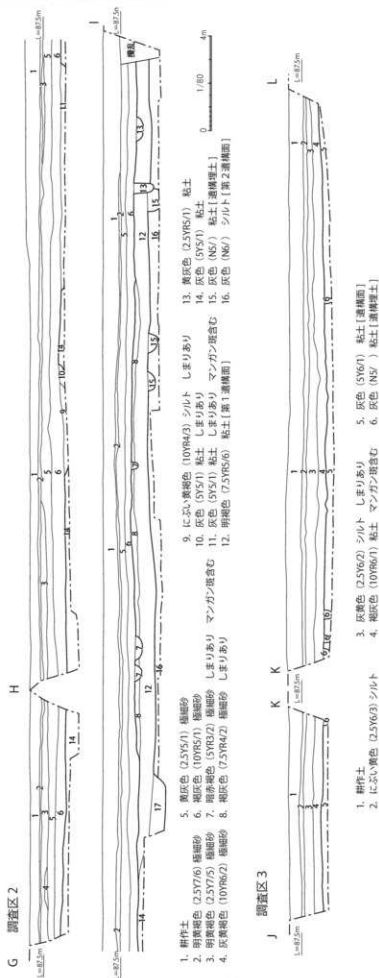


図3 調査区1 遺構平面図





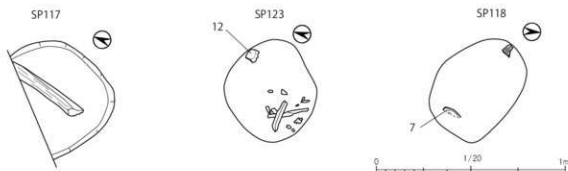


図7 遺物出土状況

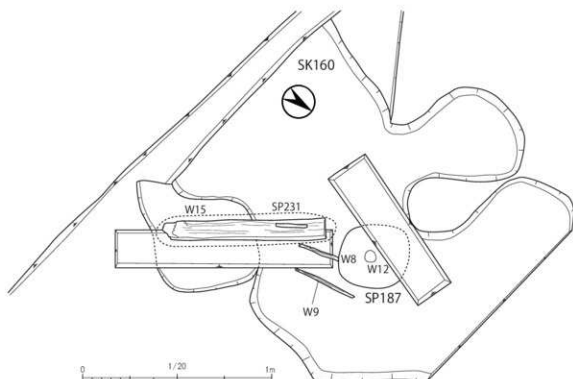


図8 木製品出土状況

調査区3 地表面下約0.7mまで掘り下げた結果、最上層には耕作土があり、床土であるにぶい黄色シルト層（2層）、灰黄色シルト層（3層）、褐灰色粘土層（4層）が堆積する。そして地表面下約0.7mで遺構面である灰色粘土層（5層）を確認した。調査区3においては東側にかけて高くなる傾向にある。

調査の概要 遺構は調査区1ではピットや土坑、溝、調査区2ではピットや土坑、掘立柱建物3棟、溝等を検出した。また調査区3ではピットを検出した。以下で主な遺構の概要を述べる。

調査区1

SD05 南西から北東方向に伸びる素掘り溝である。上端幅約1.3m、深さ約0.15mを測る。底部レベルは0.1mほど北側が高く、南流する。配置から調査区2のSD120と同一の溝と考えられ、事前の市道敷設部分の試掘調査ではSD05より西側は遺構の数が激減することが判明していることから区画溝としての機能が想定される。出土遺物としては須恵器Gの蓋（1）がある。

調査区1では多数のピットは確認できたものの、建物等の復元は行うことはできな

かった。

なお、調査区1では遺構掘り下げ後、下層確認のため南側を掘り下げたが、遺構・遺物ともに確認できなかった。

調査区2

SD120 南西から北東方向に直線的に走る素掘り溝であり、調査区1のSD05と同一のものと思われる。SD125に後出する。上端幅は1.9～2.2m、深さは約0.15mを測り中心に向かって深くなる。底部レベルは南西～北東でほぼ一定である。埋土は褐色極細砂層、灰色シルト層が堆積する。埋土からは須恵器の蓋（9・10）や須恵器杯B身（11）が出土した。出土遺物から、7世紀末～8世紀前半頃に溝の機能時期の一点を求めることができる。

SD125 SD120に切られる溝で深さは約0.1mを測る。埋土からは土師器の長胴甕（13）が出土した。

SD160 調査区2の南側で検出した。当初は土坑かと想定したが、南北方向に走る素掘り溝となる。やや蛇行し多数のピットと切りあい関係にある。深さは約0.2mを測り、底部レベルはほぼ一定となる。埋土は黄灰色シルト層が堆積する。またやや南側で溝に後出し斜めに埋められた柱材（W15）が出土した。W15は炭化した部分を南側に寝かせた状態で出土しており、SP187の柱根（W12）とは接合関係にはならないことからみてもSP187から抜き取ったものとは考えにくい。SB01以外の柱材、もしくは建築部材の可能性を想定したい。遺物としては須恵器杯Hの身（21）や木製品（W7～W10）等が出土している。

SD165 南北方向に伸びる素掘り溝である。やや蛇行し北東側では二股に分かれる。上端幅は0.6～1.3mを測り、深さは約0.15～0.2mを測る。底部レベルはほぼ一定となる。埋土は灰褐色シルト層が堆積する。遺物としてはミニチュアの短頸壺（22）が出土している。

SD190 南西から北東方向に伸びる素掘り溝である。上端幅は0.7～1.0mを測り、深さは約0.15mを測る。底部レベルは南西側が5cmほど低くなり、南流する。埋土は黄灰色シルト層、灰褐色シルト層が堆積する。

掘立柱建物 調査区2では掘立柱建物を3棟確認した。B01・02は主軸を同一とせず、切りあい関係からも複数時期が想定される。

SB01 調査区2のやや東側で検出した。SD160に後出する南北2間（6m）以上×東西1間（3m）を測り、柱間寸法は東西間が長くなる。建物の主軸はN-4-Wとなる。柱穴掘り方のプランは直径約0.3～0.5mで円形ないし楕円形を呈しており一定していない。深さは遺構検出面から0.3～0.6mを測る。またSP154で確認した柱根（W11）は表面部分が炭化する。柱穴埋土は、上層にぶい黄褐色粘土、下層に褐灰色粘土が堆積する例がみられる。建物を構成するSP187からは須恵器杯Hの蓋（20）が出土した。

SB02 調査区2の東側で検出した南北1間（3m）×東西2間以上（4.5m）を測り、柱間寸法は東西間が長くなる。建物の主軸はN-67-Wとなる。柱穴掘り方のプランは直径約0.3mのものが多く、円形を呈するものが多い。深さは遺構検出面から0.4～0.3mを測る。SB02で確認できた柱根は先端が鋭く加工される。柱穴埋土は、黄灰色粘土が堆積する例がみられる。SD165に切られる。建物を構成するピットから全体の形状が復元できる遺物は出土しなかった。

SB03 調査区2の西側で検出した。南北2間（3.8m）以上×東西1間以上を測る。建物の主軸

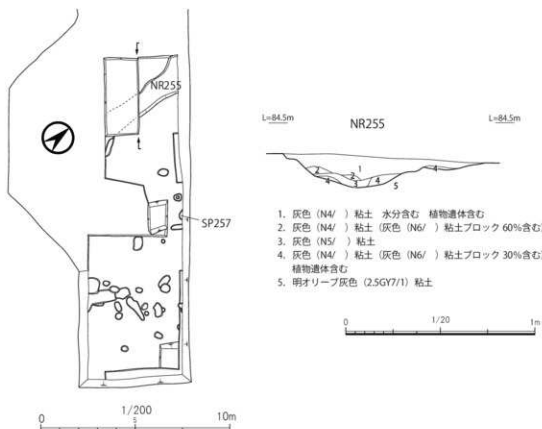


図10 調査区2 第2構面

る。埋土は灰色粘土が堆積する。明瞭なラミナによる自然堆積を示すことから流路とした。植物遺体を多く含む。出土遺物としては須恵器杯Hの身(29)等がある。

出土遺物 調査区からは遺物整理コンテナで10箱分の遺物が出土した。このうち土器32点、木製品28点について図を掲載しており、以下で出土遺構ごとに概要を述べていく。なお、調査区3では遺物掘削時に土師器の小片が出土したものの全体形状を復元できず実測には至らなかった。

調査区1 1は須恵器Gの蓋。つまみは先端がとがる形状のもので、内面は回転ヨコナデ調整、天井部は回転ヘラケズリ調整を施す。2は須恵器Gの身である。比較的扁平な底部からゆるやかに立ち上がり、口縁端部を単純に収める形状である。内外面を回転ヨコナデ調整し、底部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。SP56から出土した。3は須恵器杯Hの身である。器壁は厚い。内外面回転ヨコナデ調整を施す。SP58から出土した。4は須恵器のミニチュアの蓋。内外面回転ヨコナデ調整を施し、つまみを有した可能性がある。SP67から出土した。5は高杯の脚部もしくは器台の脚部。内外面回転ヨコナデ調整を施す。SP72から出土した。6は須恵器杯Bの蓋。天井部には降灰が確認できる。

須恵器G身や須恵器H身等から7世紀後半～8世紀初頭の年代観が与えられる。

調査区2 上層 7は須恵器杯Hの蓋で、内面は回転ヨコナデ調整、外面は回転ヘラキリ不調整で外面はかなり粗雑に仕上げられる。8は須恵器の杯Aである。口縁端部は単純に収める形状である。内外面は回転ヨコナデ調整する。9は須恵器の杯B蓋。10も須恵器の杯B蓋。ボタン状のつまみをもち、口縁端部を下方に短くつまみ出す。内外面は回転ヨコナデに

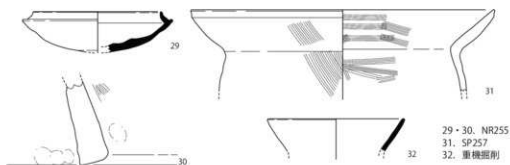
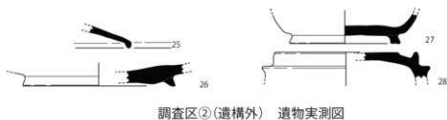
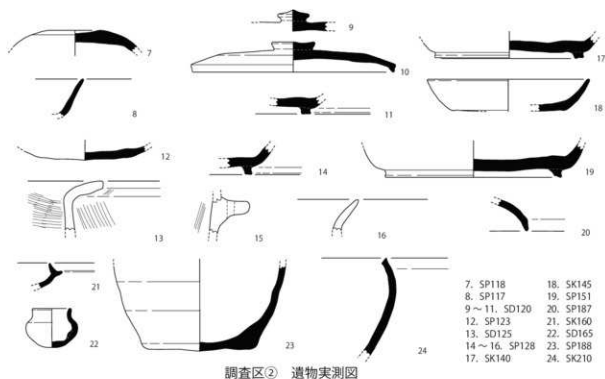
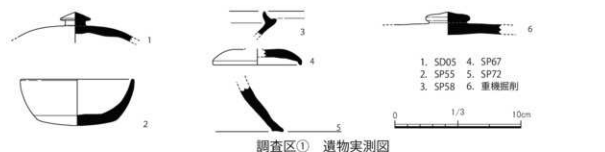


図 11 出土土器実測図

より調整するが天井部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。内面には墨が付着し転用硯と思われる。なお、SD120の上層のものと接合したが上層のものは墨がなく、須恵器が破損したのち転用したと思われる。また上層のものは外面に一条墨によるとと思われる線が描かれている。11は須恵器杯Bの身。底部外面にはタール状の物質が付着する。12は須恵器壺の底部で、内面は回転ヨコナデ調整を基調とするが、不定方向ナデを加える。外面は回転ヘラキリ不調整を施す。13は長胴甕の口縁部か。口縁部を外方に折り曲げ、内面にはヨコハケ、外面にはナメハケを施す。外面には煤が付着する。SD125から出土した。14は須恵器杯Bの身である。底部内面は回転ヨコナデ調整を施す。15は土師器の把手付きの器種である。把手の穴は片側から刺突される形で穿たれる。内面はハケメが施される。16は土師器の甕か。17は須恵器の杯B。底部には墨と思われるタール状の物質が付着する。内面は回転ヨコナデ調整を基調とするが、不定方向ナデを加える。18は須恵器の須恵器の杯Aである。口縁端部は単純に収める形状である。内外面を回転ヨコナデ調整する。19は須恵器皿Bもしくは杯B身の底部。高台は底部外縁のやや内側に貼付する。底部内面は不定方向ナデを加える。底部は回転ヘラキリ後、不調整である。20は須恵器杯Hの蓋である。口縁部外面には降灰の痕が残る。21は須恵器杯Hの身である。SK160から出土した。22は須恵器のミニチュア短頸壺である。比較的粗雑に作られ、口縁部外面には自然釉が付着する。23は壺類の底一身体片と目される。SP188から出土した。焼きぶくれが確認でき、内外面回転ヨコナデ調整となる。底部は回転ヘラキリ不調整。24は鉢Aである。口縁端部は内傾する。いわゆる鉄鉢形。SK210から出土した。

杯H身・蓋やかえりなしの杯B身等の出土遺物から7世紀末～8世紀前半の年代観が与えられる。

重機掘削時出土 25は須恵器杯B蓋。26は壺類の底一身体片か。底部は厚く、底部内面は回転ヨコナデ調整を基調とするが、不定方向ナデを加える。底部外面中央は回転ヘラキリ不調整である。高台は三角形を呈す。27は須恵器の杯Bと目される。高台は外側に踏ん張る形となる。内外面は回転ヨコナデ調整を施し、底部は回転ヘラキリ不調整となる。28は須恵器の定形円面硯である。調査区2の中央部（SK145のあたり）で重機掘削時に出土した。比較的磨面は滑らかである。径11.2cmで、比較的小型である。硯面が一部残存するのみで脚部の形状は不明である。

第2遺構面 29は須恵器杯Hの身である。内面と外面上半を回転ヨコナデ調整、底部外面は回転ヘラケズリを施すが一部回転ヘラキリ不調整が残る。NR255から出土した。30はカマド形土器の底部か。内面にはユビナデ痕が顕著に残り、外面にはハケ調整が確認できる。31は長胴甕である。外面には一部煤が付着する。口縁端部は端部を上方につまみ出す。体部外面はナメハケ、体部内面はヨコハケを施す。SP257から出土した。32は長頸壺の口縁部である。器壁は薄い。外面は降灰による自然釉が確認できる。内外面回転ヨコナデ調整である。

第2遺構面出土した須恵器杯Hは口径10.1cmとかなり径が縮小しており、第2遺構面は7世紀中～7世紀後半（飛鳥Ⅰ～Ⅱ）の年代と考えておきたい。

木製品 W1は全面が炭化する。先端は刃物による切断痕のようなものが見られる。W2～W3は先端が炭化する。W2は燃えさして、先端部が炭化する割製材。反対の端部に断

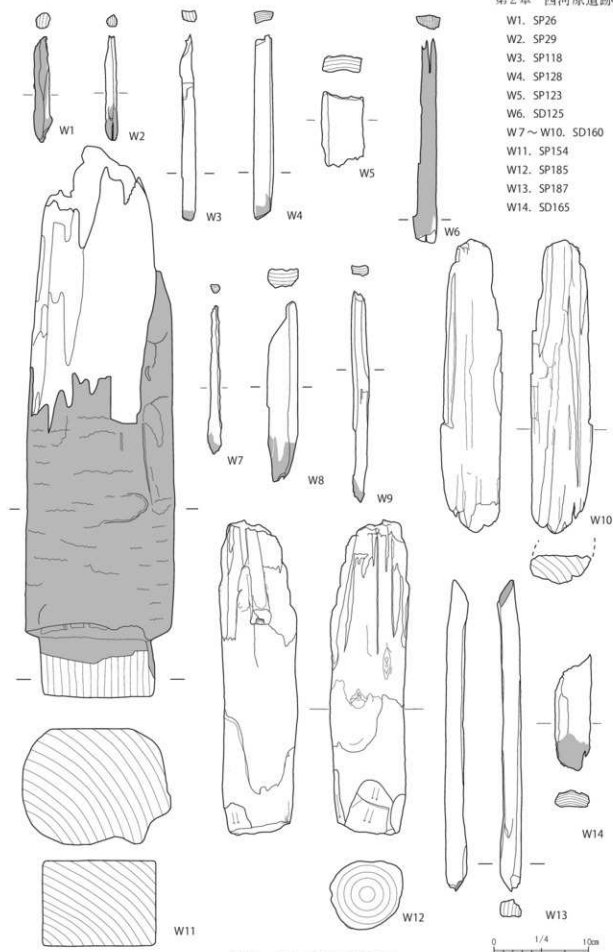


図 12 出土木製品実測図①

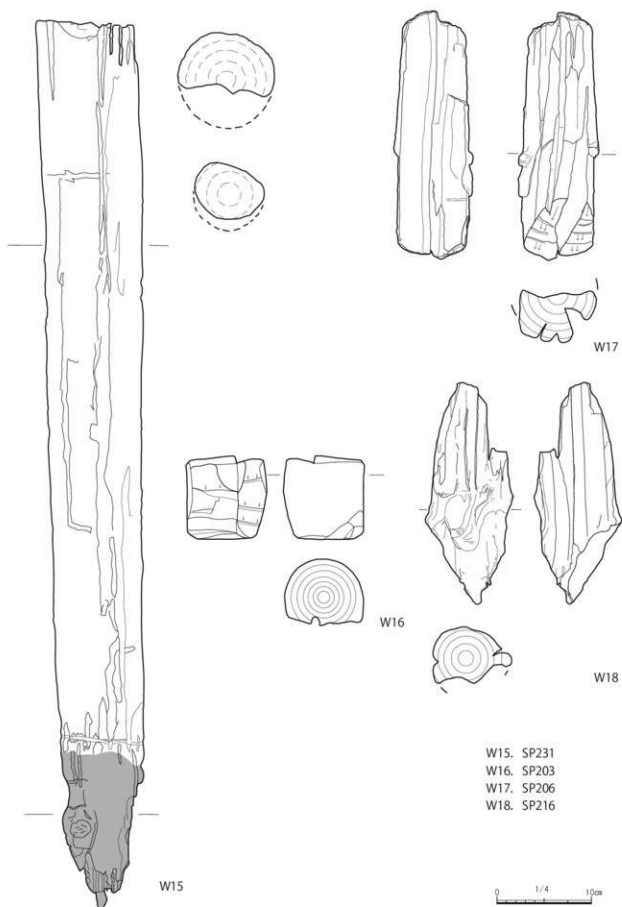


図 13 出土木製品実測図②

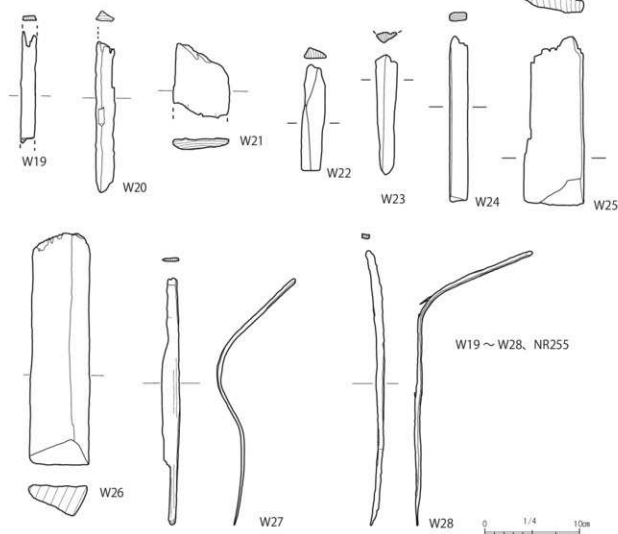


図14 出土木製品実測図③

ち切ったような痕跡がある。W3は炭化部分が斜めに切断される。W4の側面は面をなす。炭化部分が刃物によって切り落とされたように見える。W5は角材で端部が斜めに切り落とされる。W6は全面が炭化する。加工痕は確認できない。W7～W9は先端が炭化する。W7は割裂材。W8は炭化部の反対の端部を明瞭に切断している。W9は割裂材。W10は柱材、もしくは何らかの建築部材か。W11はSB01を構成するSP154の柱材である。四方枠目の材。表面は腐食防止のため炭化する。下端部は臍が削りだされ、断面四角形を呈す。臍部分を下にして検出した。臍部分は何らかに差し込むためのものと思われるが対となる建築部材は確認できない。またW11は他の柱材と径が異なり、転用材としても疑問が残る。W13は割裂材で、両端を明瞭に切断している。燃えさしと想定される。先端部は炭化するが炭化部分が薄く、複数回の使用はしていないと思われる。曲がった形状。W12は柱材で芯持ち材を用いる。上端を欠損しており、下端も先端部を欠損するが切り落とし、先端を尖らせる形状となる。W14は燃えさしで先端部が炭化する割裂材。反対の端部に断ち切ったような痕跡がある。W15は柱材か。先端部は炭化する。W16は柱材で芯持ち材を用いる。上端を欠損しており、下端は斜めに切り落としている。W17は柱材で芯持ち材を用いる。上端を欠損しており、下端は先端部を欠損するが切り落とし、先端を尖らせる形状となる。W18も柱材で芯持ち材

を用いる。上端を欠損しており、下端は斜めに切り落としている。W19～28はNR255から出土したものである。W19は用途不明の板材で上端・下端共に欠損する。W20は角材で先端部は斜めに切断される。W21は板材で先端を斜めに切り落とす。用途は不明である。形状が残っている部分は加工痕が明瞭にのこる。W22は角材で先端を斜めに切り落とす。W23は用途不明の角材。W24は用途不明の板材で上端・下端共に欠損する。W25・26は割材で先端を斜めに切り落とす。W27・28は折敷の側板と想定される。

まとめ

今回の調査では調査区2の北東側では遺構密度が高く一方で調査区1の南西側では遺構は低調であった。また令和3年度に実施した本調査地の西側の調査でも遺構は確認できていない。このことから調査区の南西側に行くに従い遺構の密度は希薄になっていると判断できる。

遺構については、ピットは多数確認できるが多くは配列等が復元できない。調査からは方位を異とする建物が数棟検出されたことから何回か建替えがあったとみられる。また掘立柱建物などは全体的な広がりを見せず、散在する状況にある。さらに本調査地は官衙機能の中心部というよりも、周辺に配置された諸施設が点在する箇所位置すると想定される。

遺物について、定形硯が1点出土している。西河原遺跡群出土の硯について検討を行っている濱修・木下義信両氏によると年代の判明するものの中では第3・4期（7世紀末～8世紀前半）のものが多くとしている〔濱・木下2009〕。今回出土した定形硯は重機掘削時に出土したものであるが、周辺の遺構の状況・出土遺物からも同じような年代観が与えられる。なお、板谷氏は北野博司氏の陶硯の使用痕に着目した試みに注目し、陶硯の場合、硯面が平滑でありながら、墨の付着の確認ができないものは墨磨りの頻度が低かったか、使用されなかったとしている〔板谷2005〕。本調査地の定形硯も墨磨りとしては使用していない可能性がある。

また転用硯としては3点出土している。転用硯は西河原遺跡群内では西河原森ノ内遺跡・西河原宮ノ内遺跡の出土が全体の9割以上で、さらに出土した転用硯の8割以上が須恵器杯蓋を転用したもので、残りは須恵器杯の高台内に使用痕が観察されたとしている〔濱・木下2009〕。本調査地で確認された転用硯は杯蓋1点、杯B身2点で母数は少ないながらも追認できたといえる。近接する西河原宮ノ内遺跡では硯とともに多数の削り屑を含む木簡が出土しており、当該地周辺で文書製作活動が実際に行われていた可能性がある。

調査地2の下層、NR255で確認された杯Hの身について、径が小さく7世紀中～7世紀後半（飛鳥Ⅰ～Ⅱ）のものと考えられる。これは西河原遺跡群でも最初の時期であり、前身の集落の存在が想定される。東側に位置する湯ノ部遺跡では溝から丙子（天武5＝676）年のものとみられる螺木簡が出土しており、近しい時期ものとなる。西河原遺跡群第1期のものとした場合遺構としては数が少ないことから注目される。

ミニチュアの短頸壺（22）と蓋（4）についてこの時期のものとしては類例を聞かず、資料の蓄積が期待される。

本報告書の執筆にあたり、木製品について前田仁暉氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げます。

（渡邊）

参考文献

- 浦 蓉子 2021 「奈良時代の燃えさしについて」『古代の灯火－先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究』
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 尾野善裕 2019 「飛鳥時代宮都土器編年の再編に向けて－飛鳥・藤原地域を中心に－」『飛鳥時代の土器編年再考』
奈良文化財研究所・歴史土器研究会
- 板谷桃代 2005 「古代における硯の使用痕について－紫香楽宮関連遺跡出土資料を中心に－」『淡海文化財論叢』
淡海文化財論叢刊行会
- 佐藤 隆 2004 「8世紀の須恵器編年と難波宮・平城宮の並行関係－陶器窯跡編年の再構築に向けて・その2－」『大
阪歴史博物館研究紀要』第3号
- 畑中英二 2008 「古代地方木簡の世紀－7世紀の木簡と西河原遺跡群出土木簡－」『古代地方木簡の世紀 西河原
木簡から見えてくるもの』勸励賀県文化財保護協会
- 濱修・木下義信 2009 「西河原遺跡群における文書行政の在り方について－硯の出土を中心に－」『紀要』第22
号 勸励賀県文化財保護協会

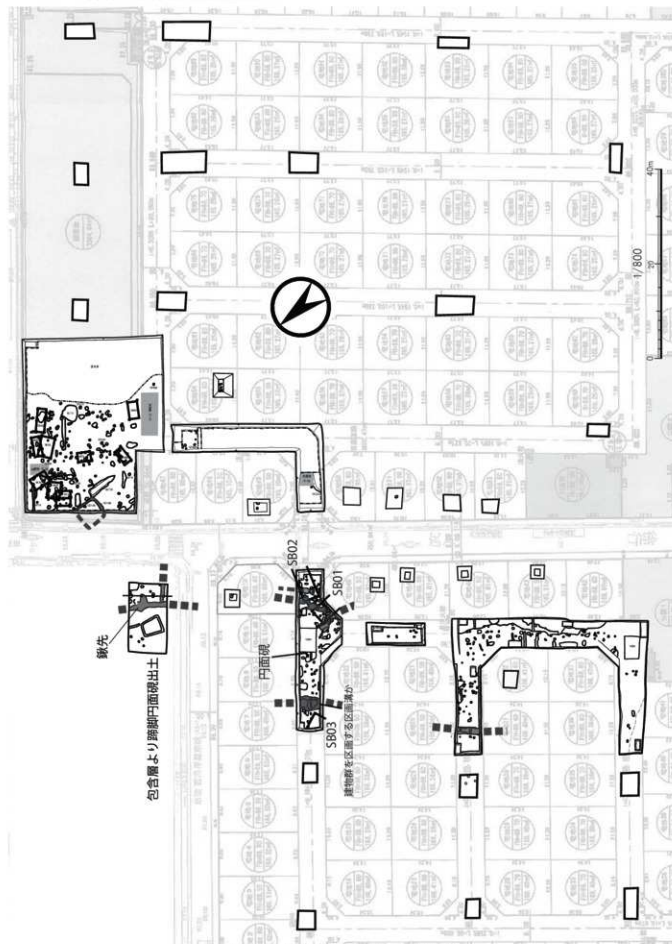


図 15 西河原遺跡・湯ノ部遺跡第 1 遺構面



調査区1 北側（南から）



調査区1 北側（南東から）



調査区1 東隅（南から）



調査区1 東壁土層断面



SP55 遺物出土状況



調査区1 東側（南から）



調査区1 南側（東から）



調査区1 南側 下層確認



調査区2 北側 (南から)



調査区2 北側 (西から)



調査区2 中央 (西から)



調査区2 南側 (南東から)



調査区2 中央 (北西から)



SD120 (北西から)



SP118 遺物出土状況 (西から)



SP123 (北西から)



SD160 (北東から)



SD160 木材出土状況 (東から)



SP154



SP182



SP187



SP203



SP216



SP206



調査区2第2遺構面（北から）



調査区2第2遺構面（北から）



調査区2第2遺構面 北西側（南東から）



調査区2第2遺構面 SP257 遺物出土状況



調査区2第2遺構面 NR255（東から）



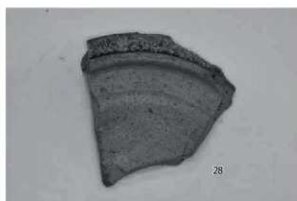
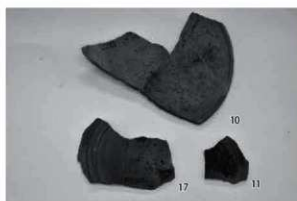
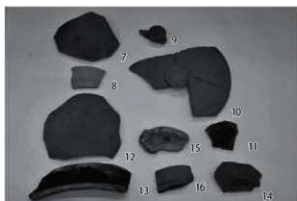
調査区2第2遺構面 NR255



調査区3（北東から）



調査区3 北壁土層断面



第3章 小篠原遺跡

調査地 野洲市小篠原字堂ノ後 1977 番 4、1977 番 5、1978 番 5、1978 番 6、1978 番 7、1981 番 4、1981 番 5

調査原因 店舗付き集合住宅建設

調査期間 令和5年10月16日～令和5年11月10日

調査経過 小篠原遺跡は、縄文時代から近世にかけての集落遺跡として周知されている。今回の調査地は遺跡の中心からやや西にあたる。

本調査地と隣接した近年の調査としては、令和3年度（2021）に市道を挟んだ北側（小篠原字堂ノ後 1975 番 1）やその東側（小篠原字六ノ坪 1954）にて調査が行われている。

北側での調査（小篠原字堂ノ後 1975 番 1）では 12 世紀頃の井戸が検出され、遺物は黒色土器等が出土している。その東側（小篠原字六ノ坪 1954）では 7～8 世紀頃の建物群が確認されている。さらに近辺の調査として、本調査地北側（小篠原字堂ノ後 1982-1 他）昭和 63 年（1991）の調査にて、平安時代の掘立柱建物や溝、ピット等を検出している。また南側（小篠原字堂ノ後 1977-1 他）地点では昭和 56 年（1981）に調査が行われ、およそ 11 世紀頃の掘立柱建物、溝、土坑、井戸等を検出している。

上記の調査成果から、本調査地周辺は遺構密集地であることが判明しており、遺構・遺物が残存していることが予想された。現地での発掘調査は令和5年10月16日～令和5年11月10日までの間に行った。

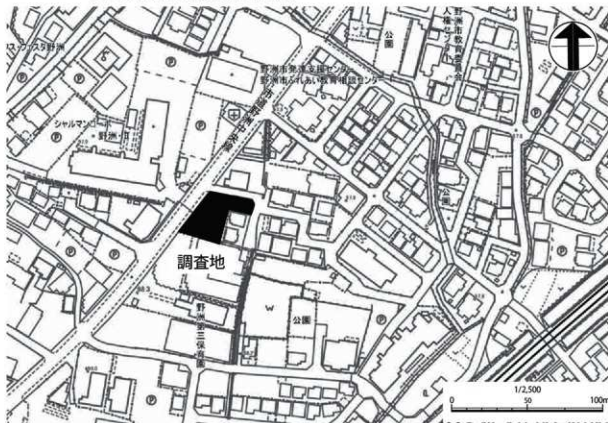


図1 調査地位置図

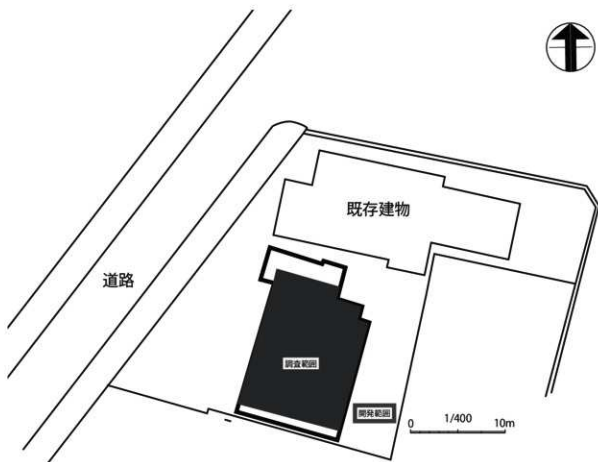


図2 調査区配置図

基本層序 今回の調査は、建物建築範囲に約 188㎡の調査区を設定した。調査は重機による盛土の掘削を行った後、人力による遺構検出及び掘削を行った。

調査区は現地表面下約 1.4m（標高約 97.0m）の灰褐色（7.5YR4/2）粘砂に褐色灰（7.5YR5/1）混じる層まで掘り下げ、この層で溝、ピット、建物跡等を検出した。なお、遺構面は現地表面下約 1.2m（標高約 97.2m）である。以下で概要を報告する。

調査の概要 遺構は溝、ピット、建物跡等を確認した（第3図）。なお、調査区の一部分は近現代に攪乱を受けていた。

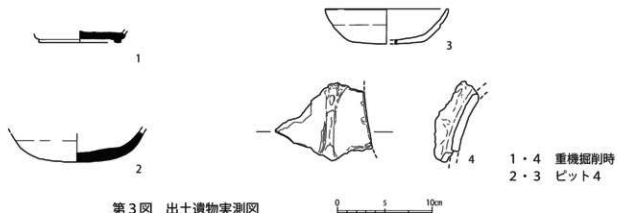
建物 調査区の中央付近から西部に1棟、東部で2棟検出した。

SB01は南北2間の建物である。東西は確認できなかったが2間と思われる。柱穴からは遺物は出土していない。柱穴の大きさは30cmである。

SB02は東西2間（1.8m）南北2間（2.2m）以上の建物である。柱穴から遺物は出土していない。柱穴の大きさは50cm程度であるが外周に一回り大きな掘方を持つものが見られる。深さは20cm～30cm程度を測る。

SB03は東西2間（1.8m）南北2間（1.8m）以上の建物である。柱穴から遺物は出土していない。柱穴の大きさは40cmである。

その他 調査地西側にてピット4から8世紀頃と思われる土器の細片が出土した。このピットには建物1が隣接しており関係が窺える。



第3図 出土遺物実測図

遺物

遺物はコンテナ2箱分出土したが、細片が多く図化できたのは4点である。

1は須恵器の高台付杯である。脚部の径は8.5cmを測る。残存度が低く判然としないが2は須恵器壺の底部と思われる。3は土師器の杯である。口径は13.0cmで器高は3.7cmを測る。4は甕と思われるが判然としない。

まとめ

以上のように、本調査地ではおよそ8世紀頃の掘立柱建物を検出することができた。なお、前述のとおり本調査地北から東にかけて50m程離れた所に位置する小篠原字六ノ坪周辺の調査でも多くの掘立柱建物を確認しており、本調査において確認した掘立柱建物もこれに属するものと思われる。

(鈴木)

参考文献

- 「昭和56年度三堂野々宮他発掘調査概要報告書」 野洲市教育委員会 1982年
 「令和4年度 野洲市埋蔵文化財調査概要報告書」 野洲市教育委員会 2023年



調査区全景（掘削前）



調査区全景（南側）東から撮影



調査区（南側）南壁



調査区全景（北側）東から撮影



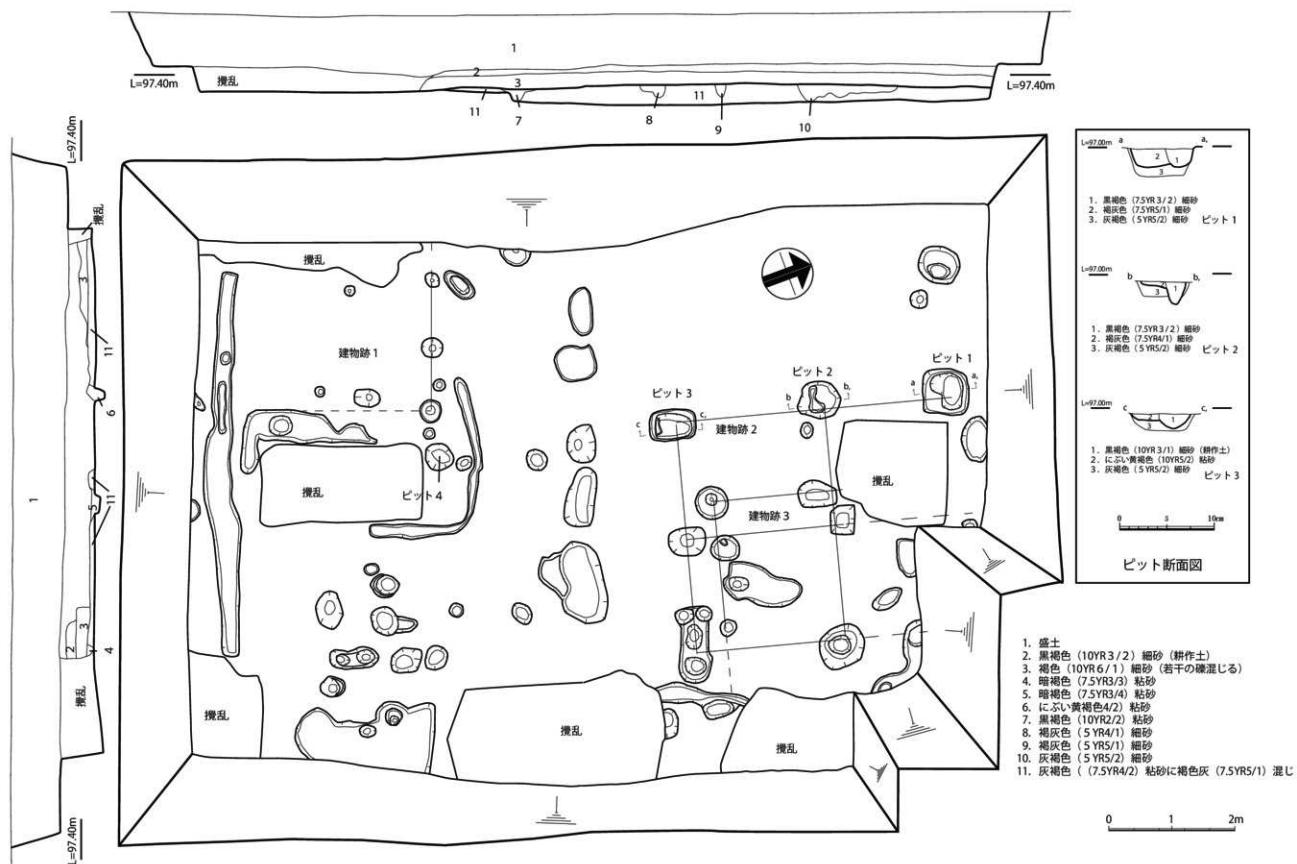
調査区（北側）西壁



建物跡1



建物跡2・3



第4図 遺構平面図・土層断面図

第4章 なか はた ふる さと 中畑・古里遺跡

調査地	野洲市行畑字村ノ内 891 番、892 番、893 番
調査原因	集合住宅建設
調査期間	令和5年11月27日～令和5年12月21日
調査経過	発掘調査は、対象地のうち集合住宅建設範囲に調査区を設定して実施した。調査面積は約152m ² である。

調査区は現地表面下約1.7m（標高約99.0m）の暗褐色礫層細砂まじりまで掘り下げた。なお、現地表面下約1.1m（標高約99.6m）暗褐色粘質土層でピットを検出し、この層が遺構面相当面と思われる。遺物は須恵器・瓦・煉瓦などが出土した。

調査地の多くは近世以降の造成等の影響により広く攪乱を受けていた。また『明治六年中畑村地券取調総絵図』にて本調査周辺が敷地となっているように、調査地北側は竹林土壌下のため砂・礫・根などが多く混じる層が深く堆積し（図2 網掛け範囲）、遺構面を確認することが出来なかった。その様な中、遺構面が残っていたのは調査地南側のみであり、ピット・土坑を検出することができたが、いずれも遺物は含まない。

出土遺物はすべて近現代頃の造成土より出土しており、他地より造成土と共にこの地に持ち運ばれた可能性がある。

なお、本調査周辺の道路部分では、標高約99.7m程度にて中世頃のピットや土坑、井戸などを検出している。本調査にて確認した遺構もこれに伴うものと考えられる。

以上のことから、本調査地は中世頃までは集落の中心部であったものの、その後敷地となり現代へと続くものと思われる。

（鈴木）

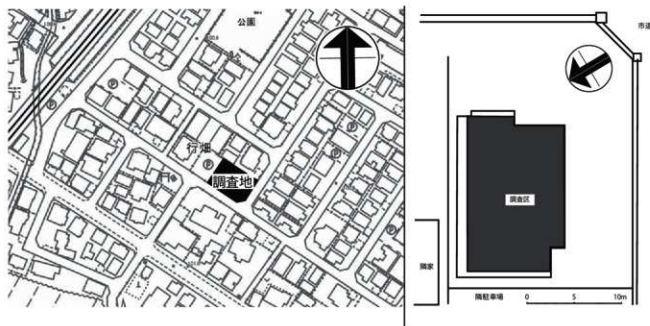
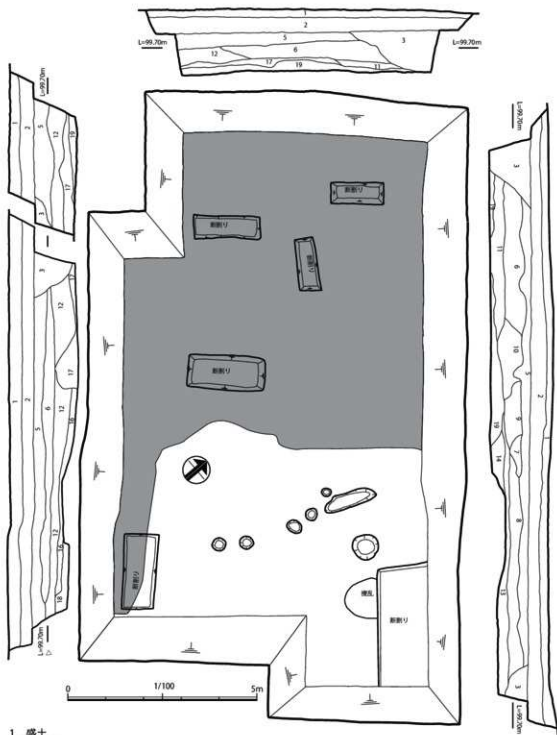


図1 調査地位置図・調査区配置図



1. 盛土
2. 整地層
3. 旧耕作土の攪乱（礫暗い土）暗紫灰(SRP3/1)粗砂礫混じりに明青灰（SPB7/1）混じる
4. 旧耕作土の攪乱（礫暗い土にレンガ、瓦、須恵器混じる）
5. 旧耕作土粘土混じる灰白（S/7/1）粘質土と灰（SY4/1）が混じる
6. 粘土（旧耕土）礫なし灰白（SY7/1）粘質土
7. にぶい黄褐色（10YR6/3）細砂
8. 黒褐（10YR3/1）細砂若干礫混じり
9. 黒褐（10YR3/1）に多量の礫混じり
10. 黒褐（10YR3/1）に礫混じりに褐灰（10YR5/1）粘砂に多量に礫混じる
11. 暗褐（10YR2/3）細砂
12. にぶい黄褐（10YR6/4）細砂に暗褐（10YR3/3）が混じる
13. 暗褐色（10YR3/3）粘質土
14. 暗褐（10YR5/1）細砂多量に礫
15. 褐（10YR4/4）粘質土
16. 褐（10YR4/6）細砂
17. 黄褐（10YR5/6）細砂
18. 褐灰（10YR4/1）粘土に多量の礫
19. 礫に暗褐（10YR6/4）細砂若干混じる

第2図 遺構平面・土層断面図



調査区全景（掘削前）



調査区全景（北側）南から撮影



調査区（北側）北壁



調査区（北側）西壁



調査区全景（南側）南から撮影



調査区（南側）南壁（北半分）



調査区（南側）南壁（南半分）

第5章 小篠原遺跡

調査地	野洲市小篠原字和田後 1922 番 4 の一部、1922 番の一部
調査原因	集合住宅建設
調査期間	令和 6 年 3 月 4 日～令和 6 年 3 月 25 日
調査経過	小篠原遺跡は、縄文時代から近世にかけての集落遺跡として周知されている。今回の調査地は遺跡の北辺にあたる。

本調査地と隣接した近年の調査としては、平成 9 年（1997）に北東側 30 m 程度の地点（小篠原字水ヶ本 1917 番 1）にて調査が行われている。この調査では、古墳時代～奈良時代頃の溝や土坑等が検出されている。さらに北側周辺（小篠原字水ヶ本 1914 番 5）でも平成 8 年（1996）に調査を行っており、溝やピット等を検出しているが、遺物も少なく平成 9 年（1997）の調査と比較すると遺構密度が低くなっていることから集落の縁辺部にあたると思われる。

上記の調査成果から、本調査地周辺は、中心部からやや外れるものの、遺構密集地であることが判明しており、遺構・遺物が残存していることが予想された。

現地での発掘調査は令和 6 年 3 月 4 日～令和 6 年 3 月 25 日までの間に行った。

今回の調査は、建物建築範囲に約 170m²の調査区を設定した。調査は重機による盛土の掘削を行った後、人力による遺構検出及び掘削を行った。

基本層序 調査区は現地表面下約 1.8m（標高約 96.7m）の褐色（10YR4/4）細砂に若干の砂礫混じる層まで掘り下げた。なお、遺構面は現地表面下約 1.2m（標高約 96.1m）黒褐色（2.5YR3/2）細砂にぶい黄褐色（10YR4/3）混じる細砂層である。以下で概要を報告する。

調査の概要 遺構は溝、ピット、建物跡等を確認した（第 3 図）。

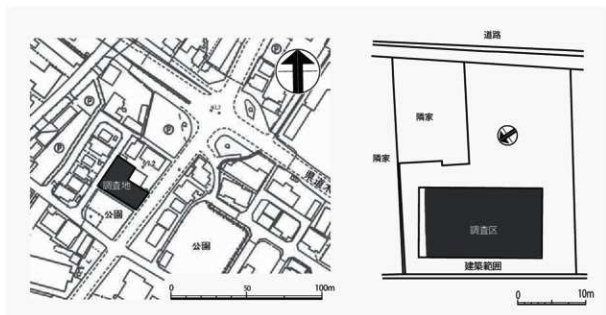
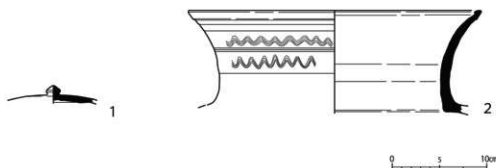


図 1 調査地位置図・調査区配置図



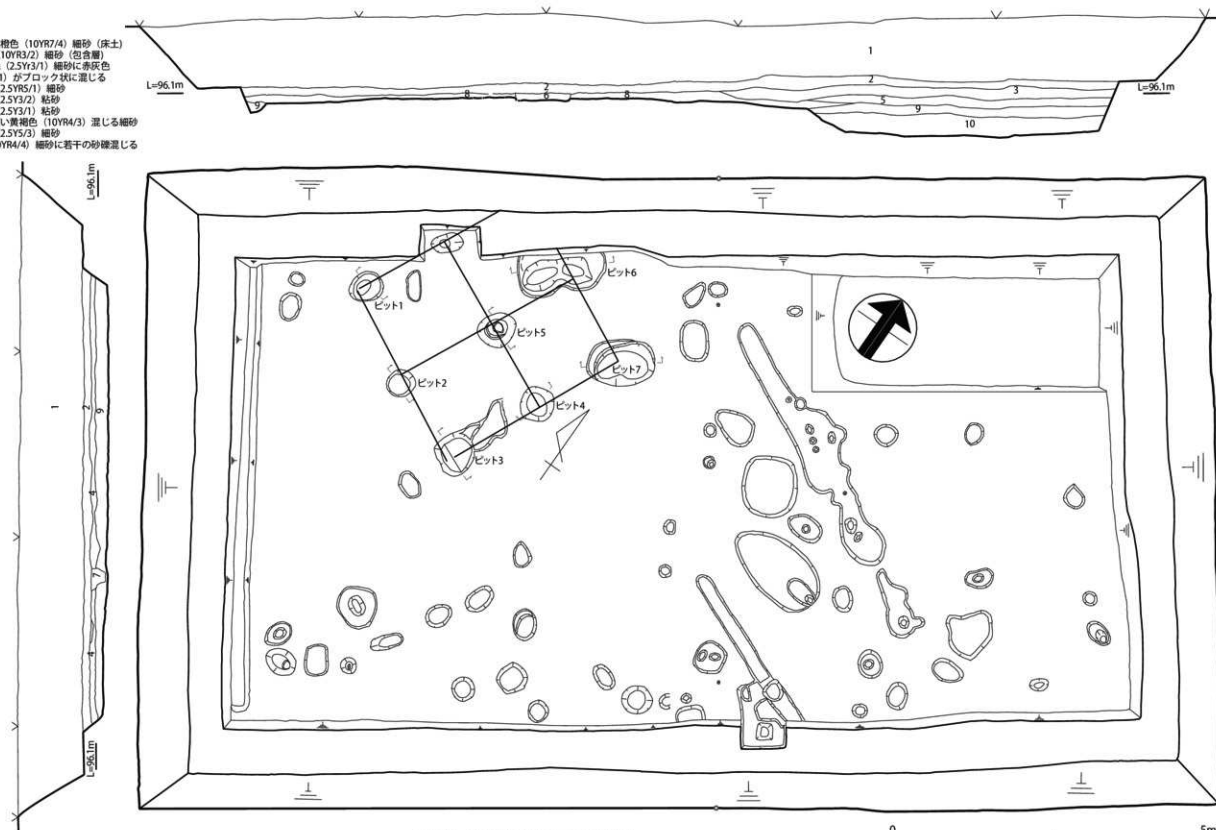
第2図 土器実測図

- 建 物** 調査区の西部に1棟検出した。
- SB01は南北2間（1.5m）、東西は2間（3.0m）以上の建物である。柱穴（ビット5）からは須恵器の小片が出土している。柱穴の大きさは50cm程度である。
- 遺 物** 遺物としては土師器、須恵器、陶器などが出土し、その量はコンテナ1箱程度である。そのほとんどが重機掘削時の包含層から出土した。ビット6からは、細片であったため図化は出来なかったが須恵器細片が出土しており杯B蓋の欠片と思われる。このことから建物の時期は柱穴等からの遺物にて7世紀後半～8世紀頃と想定される。
- 以下では図化に及んだ遺物で概略を述べていく。
- 1は宝珠摘まみを持つ須恵器蓋である。2は須恵器甕である。口径は31cm程度を測る。口縁端部は丸く内部に折り込む。口縁付近には2条の波状文が施される。1、2ともに重機掘削時に出土した。
- まとめ** 以上のように、本調査では7世紀後半～8世紀頃の建物跡を確認した。
- なお、本調査地南西側も調査されており（本書第6章）そこでは、古代の建物跡が1棟確認されている。また本調査地北東周辺での調査では遺構密度が低くなっていることから、本調査は集落の中心よりも縁辺部に近い位置と評価できる。
- （鈴木）

参考文献

- 『平成8年度野洲町内遺跡発掘調査概要』 野洲市教育委員会 1997年
 『1997年野洲町埋蔵文化財発掘調査年報』 野洲町教育委員会 1998年

1. 産土
2. にぶい黄褐色 (10YR2/4) 細砂 (床土)
3. 黒褐色 (10YR3/2) 細砂 (包含層)
4. 暗赤灰色 (2.5Y3/1) 細砂に赤灰色 (2.5YR5/1) がブロック状に混じる
5. 赤灰色 (2.5YR5/1) 細砂
6. 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘砂
7. 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘砂
8. ③ににぶい黄褐色 (10YR4/3) 混じる細砂
9. 黄褐色 (2.5Y3/3) 細砂
10. 褐色 (10YR4/4) 細砂に若干の砂礫混じる



第3図 調査区平面図・土層断面図



調査区全景（掘削前）



調査区全景（北側）南東から撮影



調査区全景（南側）南東から撮影



建物跡



調査区（北側）西壁



調査区（南側）西壁



調査区（南側）西壁

第6章 小篠原遺跡

調査地 野洲市小篠原字和田後 1922 番 3、1922 番 13

調査原因 集合住宅建設

調査期間 令和6年4月22日～令和6年5月23日

調査経過 小篠原遺跡は、縄文時代から江戸時代に至る集落遺跡として周知されている。今回の調査は集合住宅建設に伴うもので、当調査地北側に隣接する過去の調査事例では、現地表面下約 1.2 m（標高約 96.1m）の高さで古代のビット、溝、総柱の掘立柱建物跡が多数検出されている（令和5年度調査・小篠原字和田後 1922 番 4 の一部、1922 番の一部）。

調査は、集合住宅建設部分に調査区を2カ所設定して反転する形で実施し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査区北東側を調査区1、南西側を調査区2とした。第2図は各調査区を合わせて合成したものである。調査面積は約 160m²であった。

なお、擁壁建設部分については工事立会を実施し、工事計画に伴い申請された掘削深度面直下（現地表面下 1.0～1.2m）で遺構面を検出したため、遺構掘削は行なわず検出のみにとどめた。

基本層序 調査区の基本層序は、盛土、床土（灰色粘土）、黒褐色粗砂まじり粘質土層、にぶい黄褐色粘質土層（黒褐色粘質土が混じる）、暗褐色粘質土層（黒褐色粘質土が混じる）と続く。現地表面下約 0.8～1.0m（標高約 96.4～96.2m）のにぶい黄褐色粘質土層（黒褐色粘質土が混じる）・暗褐色粘質土層（黒褐色粘質土が混じる）の上面を遺構面として、ビット、土坑、掘立柱建物1棟を検出した。

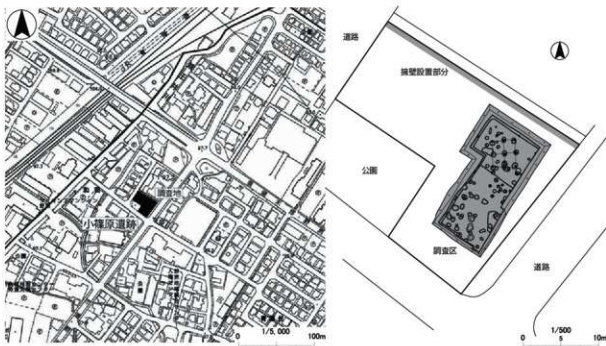
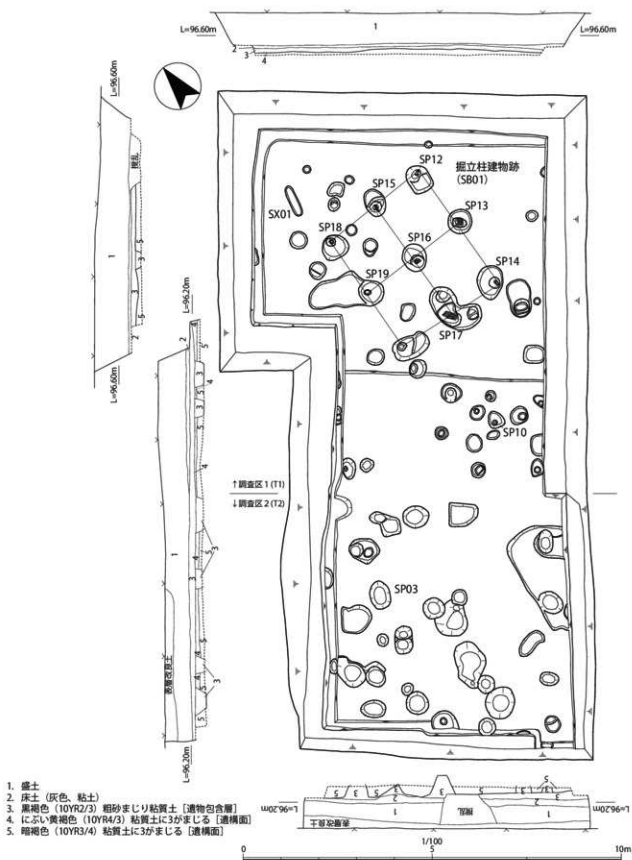
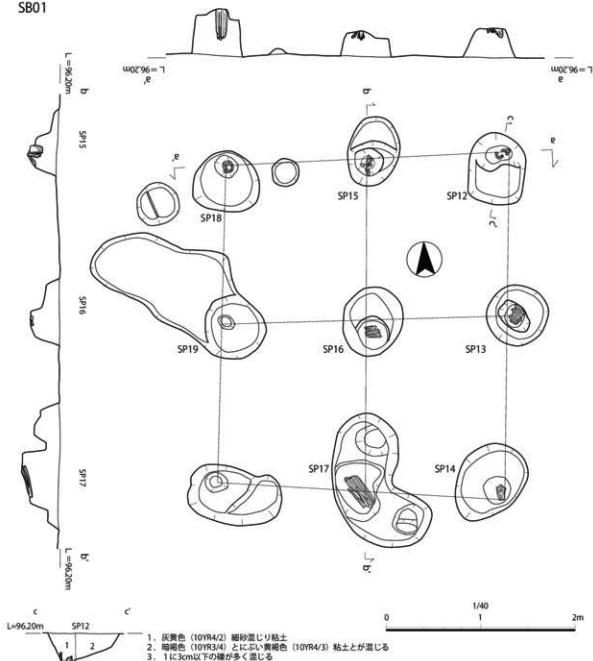


図1 調査地位置図・調査区配置図



第2図 調査区平面図・断面図

SB01



第3図 SB01遺構平面図・断面図

遺 構

以下、検出された主な遺構について述べる。なお、遺構番号については調査区1 (T1) 調査区2 (T2) それぞれにおいて通し番号を振り記録を作成している。

SB-01

調査区1で検出されたSB01は、柱穴の並びから掘立柱建物跡として復元できる。柱穴についてはほとんどが直径約0.6m、深さ約0.3～0.5mを測る。柱間は桁行2間(3.5m)、梁行2間(3.5m)を測り、主軸は南北方向となるがやや東に振れる。柱穴の埋土は暗褐色とにぶい黄褐色が混じる粘土で、SP17からは7世紀後半ころのものとみられる遺物が埋土の一部から出土している。

比較的柱根が良好に残存しており、SP12・13・15～18からは木製品が出土した。

SP12・15・18からは木柱が出土した。SP13・16・17では穴の中に伏せて据えられている状態の板材（礎板）を検出した。SP14では須恵器の甕とみられる破片が底から出土している。こちらも礎板のような意図で用いられた可能性がある。SP12・15・18については、柱根のみの出土であるが、特にSP12の柱穴の底部には3cm以下の礫が多く混じり、地盤強度が十分であると判断されたものとして礎板なしで柱を建てた可能性がある。

また、調査区1における遺構面は北東側から南西側へ向かうにつれ、やや低くなる傾向がある。SB01の南西側については、北東側に比べて全体的に遺物包含層が厚く堆積していることから、これを掘削したところ、ビット類を明瞭に検出することができた。

調査区2では重機掘削作業中に、遺物包含層より多数の須恵器が出土した。また、遺構検出によりビットを多数確認したが、建物の復元には至らなかった。ビットは深いものでは深さ約0.6mを測るものもある。

遺 物

遺物については7世期頃の土師器、須恵器を中心にコンテナ7箱分出土した。また、調査区1の遺物包含層からは古墳時代の須恵器の器台が出土した。ここでは図化可能な17点について掲載している。以下、それぞれの概要について述べていく。

1～4および6～9は調査区1、5・10は調査区2の遺物包含層よりそれぞれ出土した。

1は土師器の甕である。口径は21.0cmを測り、色調は灰白色を呈し、胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。

2は土師器の甕である。口径は23.8cmを測り、色調は浅黄色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟質である。

3は土師器の皿である。口縁部はヨコナデ調整を施す。口径は14.0cmを測り、色調は浅黄褐色を呈する。胎土は密で、焼成は良好である。

4は須恵器の甕である。口縁部から体部にかけて、ヨコナデ調整を施す。口径は11.0cmを測る。色調は灰色を呈し、胎土は密である。焼成は硬質である。

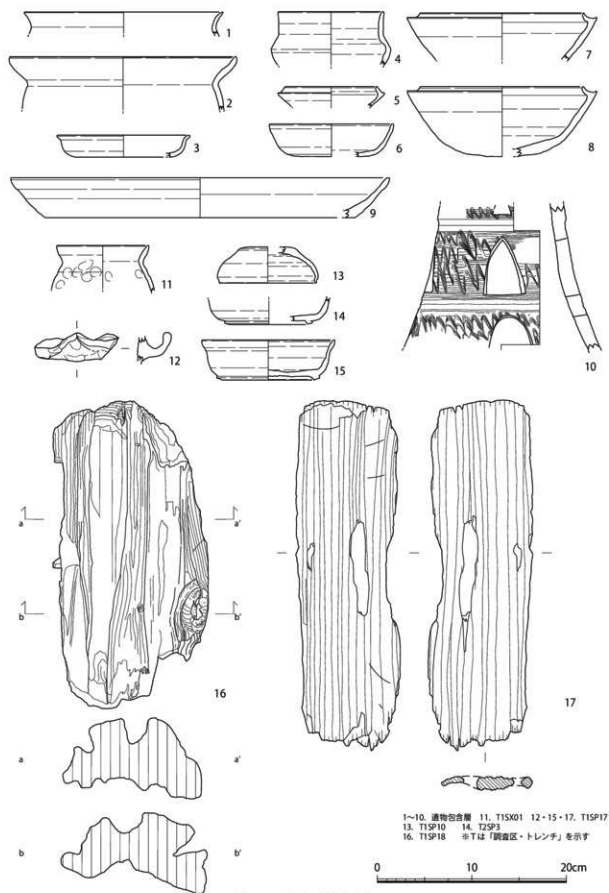
5は須恵器の返りを有する坏である。口縁部から体部にかけてヨコナデ調整を施す。口径は9.7cmに復元される。色調は褐灰色を呈し、胎土は密である。焼成は硬質である。

6は須恵器の平底の坏である。口縁部にヨコナデ調整を施す。口径は13.0cmを測る。色調は灰白色を呈し、胎土は密である。焼成は硬質である。

7・8は須恵器の返りを有する大型の坏である。口縁部から体部にかけてヨコナデ調整を施す。9は底部に丁寧なヘラ削り調整を施す。口径は8が17.2cm、9が17.0cmに復元される。色調は灰白色を呈し、胎土は1mm以下の砂粒を含む。焼成は硬質である。

9は瓦器の盤か。口縁部はヨコナデ調整を、体部から底部にかけてケズリ調整を施す。口径は40.0cm、器高は4.2cmを測る。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。外面には離れ砂とみられる雲母が付着する。13世紀頃のものか。

10は須恵器の器台である。四方向の透かしを有し、上段は二等辺三角形、中段は二等辺三角形と半円（縦長の楕円を半円状にしたもの）を交互に、下段は半円（縦長の楕円を半円状にしたもの）をそれぞれ配する。横方向のカキ目調整の後、全面に波状紋を施し、最後に2条の沈線を施す。色調は灰白色を呈し、胎土は密である。焼成は良好である。野洲市内では、各地の集落遺跡から須恵器の器台が出土する例が散在するが、二



第4図 出土遺物実測図

等辺三角形と半円形を組み合わせた透かしを有する事例は今回が初めてとなる。

11は土師器の壺である。口縁部にはナデ調整を施し、体部内外面には指頭圧痕が残る。口径は9.6cmに復元される。色調は灰白色を呈し、胎土は1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

12は土師器の把手である。各部に指頭圧痕が残る。色調は灰白色を呈し、胎土は密で焼成は良好である。

13は須恵器の蓋である。口縁部にヨコナデ調整を施す。つまみを有さず、上面は未調整である。口径は10.1cm、器高4.9cmを測る。色調は灰白色を呈し、胎土は密である。焼成は良好である。

14・15は須恵器の高台を有する坏である。外部全面にヨコナデ調整を施す。15の口径は14.0cm、器高は4.2cmを測る。色調は灰白色を呈し、胎土は密である。焼成は硬質である。

16はSP18から出土した木柱である。ほぼ半分が残存しているとみられる。底部方向に向かって加工しているようであるが明確な加工痕は確認できない。

17はSP17から出土した板材である。礎板とみられ、底に伏せられた状態で出土した。こちらも明確な加工痕は確認できない。

まとめ

今回の調査地において、遺物はおおよそ7世紀代を中心としたものが出土している。特徴としては、①独特の透かし孔をもつ須恵器の器台の出土②須恵器の大型杯の出土③掘立柱建物の柱穴の底から礎板が出土したことが挙げられる。

①独特の透かし孔をもつ須恵器の器台の出土について

須恵器の器台については、野洲市内の古墳各地から出土するほか、久野部遺跡、木部遺跡、八夫遺跡、下々塚遺跡、中畑・古里遺跡、北桜遺跡などの集落遺跡からの出土が確認されている。いずれも今回出土した器台の透かし孔のパターン（三角と半円の組み合わせ）と一致するものはなく、位置関係的に林ノ腰古墳との関係が推察されるが、集落遺跡における独自の文化として須恵器の器台を所有していた可能性もある。

②須恵器大型杯の出土について

近江における須恵器大型杯の出土事例については、野洲川流域に集中する傾向があり、当調査地では遺物包含層中からの出土であった。また、近江における大型杯についてはTK47型式並行期からTK217型式並行期に概ね時期比定されており、小篠原のものはやや小ぶりなものに分類されている（大岡2007）。

③掘立柱建物の柱穴の底から出土した礎板について

今回総柱の掘立柱建物跡を検出した際、一部の柱穴からは木柱でなく板状の木製品を検出した。明瞭な加工痕がみられないが、板状木製品を伏せて設置する理由としては、礎板として地盤補強（木柱の沈下防止）で柱の安定を図る意図があったとみられる。礎板は軟弱地盤に用いられることが多い技法であるが、守山の弘前遺跡での出土例（古墳時代後期末）などがみられる（滋賀県文化財保護協会2007）。今回小篠原遺跡から出土した礎板については、規格化されたものでない板材も含まれているが、不同沈下を防ぐ技法を用いて、条里制・方位を意識した建築が行われたことが確認された。柱穴から出土した土器などから7世紀頃に時期比定されるとともに、総

る。

以上が今回の主な調査成果として得られた内容である。当調査地周辺では造成土下において良好に遺構が残っている傾向が見られ、今後周辺の調査が進むにつれ、古代の生活の様相解明につながる発見が期待される。

(岡山)

参考文献

- ・滋賀県文化財保護協会 2008『は場整備関係（水質保全対策）遺跡発掘調査報告書 35-1 弘前遺跡Ⅰ』
- ・大岡由記子 2007「近江出土の須恵器大型坏の機能と特徴」『淡海文化財論叢 第二輯』



調査区1 北東遺構検出（北より）



調査区1 北東壁（西より）



調査区1 西壁（東より）



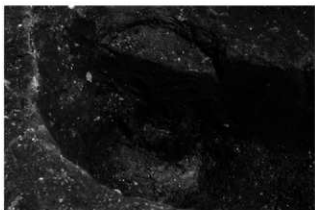
調査区1 南側 遺構検出（南東より）



調査区1 全景（南より）



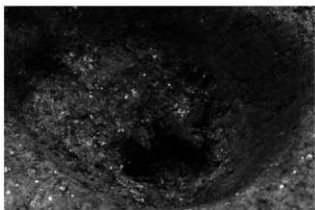
調査区1 SP10 土器出土状況



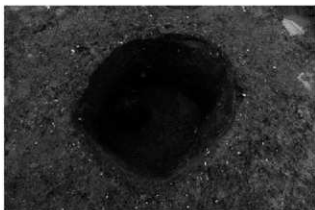
調査区1 SP12 半裁



調査区 1 SP13 (北西より)



調査区 1 SP15 (西より)



調査区 1 SP18 (西より)



調査区 1 SP17 (西より)



調査区 1 SB01 完掘状況 (西より)



調査区 2 遺構検出 (西より)



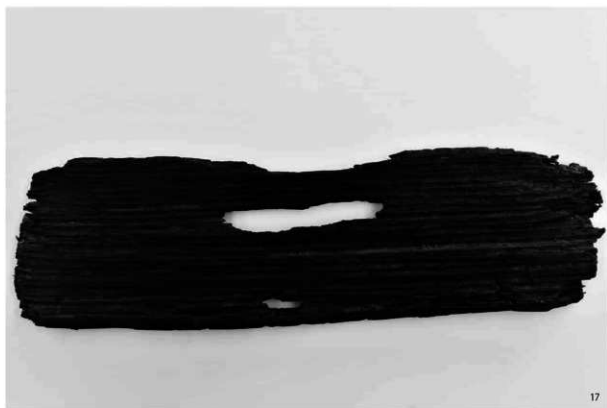
調査区 2 遺構検出 (南より)



調査区 2 全景 (南西より)







第7章 ののみや 野々宮遺跡

調査地	野洲市富波字山口甲 523 番 1、524 番 1、525 番 1、526 番 1
調査原因	宅地造成
調査期間	令和 6 年 6 月 24 日～令和 6 年 7 月 12 日
調査経過	

野々宮遺跡は、弥生時代から江戸時代に至る古墳群・集落遺跡として周知されている。

当調査地の道路を挟んで東側に隣接する過去の調査事例では、1986 年度から 1990 年度の 4 か年にかけて実施された、62,500㎡を対象とした宅地造成に伴う本発掘調査の成果が挙げられる（野洲市富波字野々宮・殿町・山ノ中地先）。特に 1 次調査では弥生時代から近世までの遺構の濃密な分布が確認されており、弥生時代の土坑・竪穴住居 6 棟、古墳時代の方墳、飛鳥～奈良時代の竪穴住居 8 棟・井戸・土坑、平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物群・溝等といった多年代の遺構が検出された。

今回の調査は宅地造成に伴うもので、道路計画部分において令和 6 年 5 月 14 日に試掘調査を実施したところ遺構・遺物の検出が確認されたので改めて本発掘調査を実施することとなった。

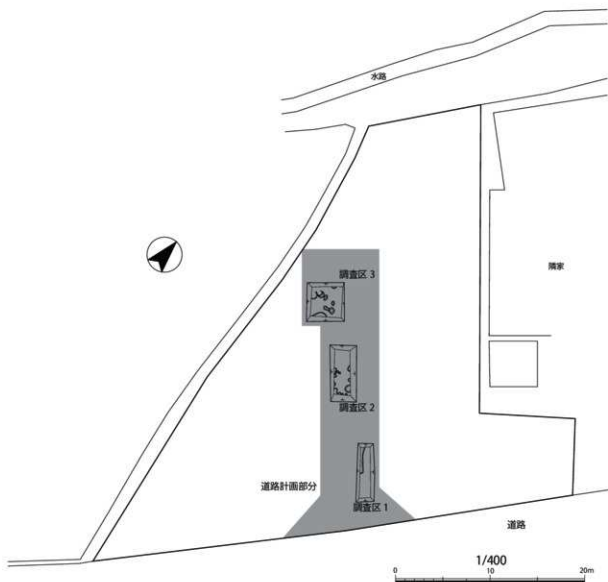
調査は、道路計画部分に調査区を 3 ヶ所設定して実施し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査面積は約 46㎡であった。

なお、調査地全体において湧水・崩落・降雨が著しく、安全確保のため最小限の掘削に留めた。

基本層序 調査区の基本層序は、耕作土、床土（灰色粘土）、褐灰色細砂層、黒褐色粘土層、黒色シルト層、にぶい黄褐色粗砂層・オリブ褐色粗砂層（遺構面）、淡黄色粘土層（遺構面）と続く。現地表面（場所によって高低差あり）下約 0.7～1.0m（標高約 92.0～92.4m）のにぶい黄褐色粗砂層・オリブ褐色粗砂層、淡黄色粘土層の上面を遺構面として、溝、ピット、土坑を検出した。



図1 調査地位置図



第2図 調査区配置図

遺 構 以下、検出された主な遺構について述べる。

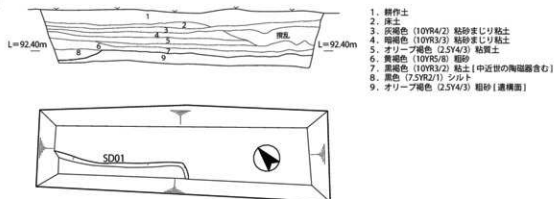
SD01 調査区1で検出されたSD01は、深さ約0.16mの溝で、幅は0.5m以上を測る。標高約92.1mで検出され、調査区1の西側へ続くとみられる。埋土は黒色のシルトで、オリブ褐色粗砂層を遺構面とする。

調査区2・3では遺構検出によりビットを多数確認したが、建物の復元には至らなかった。

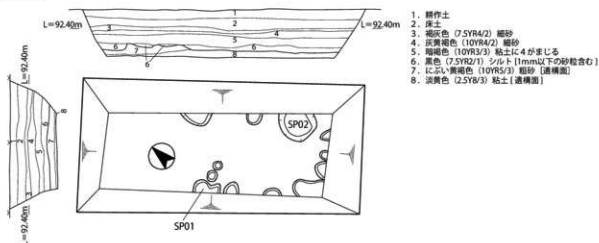
SP01 調査区2で検出された深さ0.03m、直径約0.2mのビットである。標高約91.9mで検出され埋土から中世の土師器皿とみられる小片が出土した。埋土は黒色のシルトで、淡黄色粗砂層を遺構面とする。

SP02 調査区2の東隅付近で検出された深さ0.24m、直径約0.8mのビットである。標高約91.9mで検出され埋土は黒色のシルトで、淡黄色粗砂層を遺構面とする。

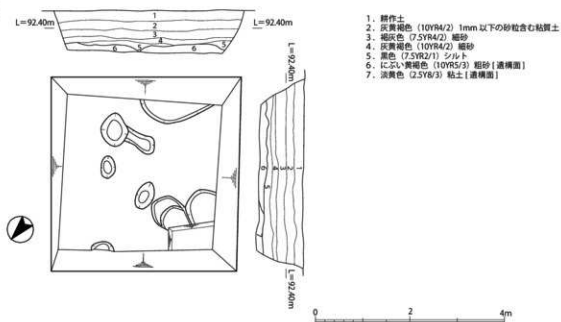
調査区 1



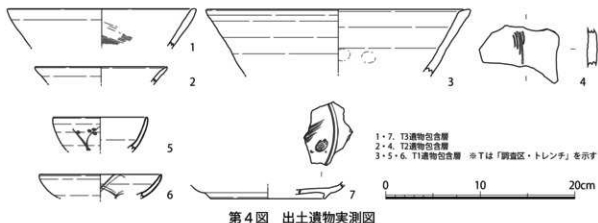
調査区 2



調査区 3



第3図 調査区平面図・断面図



遺 物 遺物については中～近世の土師器、陶磁器を中心にコンテナ1箱分出土した。ここでは図化可能な7点について掲載している。以下、それぞれの概要について述べていく。

いずれの遺物も遺物包含層より出土した。なお、先行して実施した試掘調査では、土師器の炮烙、羽釜の破片が出土している。

1は土師器の甕の口縁部か。口径は19.6cmに復元される。内面にハケ目調整痕が残る。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は密である。焼成は良好である。

2は土師器の皿である。口径は13.8cmに復元される。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は密で、焼成は良好である。

3は信楽焼の鉢である。口縁部から体部にかけて、ヨコナデ調整を施す。口径は27.4cmに復元される。色調は灰白色を呈する。胎土は2mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。14世紀後半の所産とみられる。

4は信楽焼の播鉢の体部の破片である。体部内面に5条の摺目を放射状に施す。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成は硬質である。16世紀前後の所産か。

5～7は近世のものとみられる磁器碗である。口径は5が9.8cm、6が12.8cmにそれぞれ復元される。色調は灰白色を呈し、胎土は密である。焼成は硬質である。

ま と め 今回の調査地において、遺物はおおよそ14世紀後半～16世紀付近を中心としたものが出土している。

遺物包含層からの出土がほとんどであり、91.9～92.1mで遺構が検出されたことから、近世の水田耕作の影響で遺構上層部は大きく削平を受けていると判断できる。このことについては、過去の隣接調査地の調査結果とも整合がつく。

先述したとおり、今回の調査地の南西側に隣接する地点（1986年度から1990年度の4か年にかけて実施）では第1・2次調査時に標高約93.4m前後において、弥生時代の土坑・堅穴住居6棟、古墳時代の方墳、飛鳥～奈良時代の堅

当調査地周辺で現存する水田地の標高などを鑑みるに、古代集落があったと想定しても中世以降の土地利用において水田耕作等で大きく削平を受けている傾向があると捉えられる。それとともに、部分的に古代の集落跡が残っている可能性も否めない。

以上が今回の主な調査成果として得られた内容である。野々宮遺跡の西側の調査事例は少なく、当時の様相解明の一助となる成果を得られた。

(岡山)

参考文献

野洲市教育委員会 2005 『野々宮遺跡発掘調査概要—滋賀県野洲市富波字野々宮・殿町・山ノ中所在—』



調査区1 西部遺構検出（南より）



調査区1 西部全景（南より）



調査区1 東部全景（西より）



調査区 2 遺構検出（南東より）



調査区 2 全景（南より）



調査区 3 遺構検出（北西より）



調査区 3 周壁断面（北東より）



調査区 3 全景（北西より）



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	れいいわねんど やすしまいどうふんかざいちょうきがいようほうこくしょ
書 名	令和6年度 野洲市埋蔵文化財調査概要報告書
シリーズ名	野洲市文化財調査報告
シリーズ番号	100
編 集 者 名	野洲市教育委員会文化財保護課
編 集 機 関	野洲市教育委員会文化財保護課
所 在 地	〒520-2492 滋賀県野洲市西河原2400番地 野洲市北部合同庁舎2階 Tel. 077-589-6436
発 行 年 月 日	西暦 2025 年 3 月

所収道路名等	所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	道路番号					
十八田遺跡	野洲市浅田1687番地414番17番	252107	343-081	35° 04' 00"	136° 00' 07"	20200601 ~ 20200807	732	社内福利 施設建設
西河原遺跡	西河原字天皇原2026番、2027番、 2028番、2029番、2030番、2031番	252107	343-009	35° 06' 02"	136° 00' 54"	20220728 ~ 20221028	826.0	宅地造成
小篠原遺跡	小篠原字堂ノ後1977番4、 1977番5、1978番5、1978番6、 1978番7、1981番4、1981番5	252107	343-102	35° 04' 09"	136° 01' 38"	20231016 ~ 20231110	188.0	店舗付き 集合住宅建設
中畑・古里遺跡	行畑字村ノ内891番、892番、893番	252107	343-084	35° 03' 43"	136° 01' 28"	20231127 ~ 20231221	152.0	集合住宅建設
小篠原遺跡	小篠原字和田後1922番4の一部、 1922番の一部	252107	343-102	35° 04' 17"				

所収遺跡名等	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
トヨハシラ イサキ 十八田遺跡	集落跡・ その他墓跡	縄文～室町	溝・ピット・土坑	土師器・弥生土器	古代の溝・ピット・土坑を検出。
シタガハラ イサキ 西河原遺跡	集落跡	奈良～江戸	溝・ピット・ 掘立柱建物	須恵器・土師器・木製品	7世紀～8世紀代の溝・ピット・ 掘立柱建物を検出。
コシノハラ イサキ 小篠原遺跡	集落跡	縄文～江戸	ピット・掘立柱建物	須恵器・土師器	8世紀頃の掘立柱建物を検出。
ナカハラ イサキ 中畑・古里遺跡	集落跡	弥生～室町	ピット・土坑	須恵器・瓦・煉瓦	調査地南側でピット・土坑を検出。
コシノハラ イサキ 小篠原遺跡	集落跡	縄文～江戸	溝・ピット・建物跡	土師器・須恵器・陶器	7世紀後半～8世紀頃の建物跡 を検出。
コシノハラ イサキ 小篠原遺跡	集落跡	縄文～江戸	ピット・土坑・ 掘立柱建物	土師器・須恵器	古代のピット多数、掘立柱建物 1棟を検出。
ノノミヤ イサキ 野々宮遺跡	集落跡・ 古墳群	弥生～江戸	溝・ピット・土坑	土師器、陶磁器	中世の溝・ピット・土坑を検出。

野洲市文化財調査報告100

令和6年度

野洲市埋蔵文化財調査概要報告書

印刷・発行 令和7年(2025)3月

編集・発行 野洲市教育委員会文化財保護課

滋賀県野洲市西河原2400番地

〒520-2492 TEL.077-589-6436

印刷・製本 奥野印刷株式会社

